石垣市立八重山博物館開館50周年記念企画展

八重山文化研究の礎を築いた

喜舎場永珣と資料

2022（令和4）年10月

石垣市立八重山博物館

石垣市立八重山博物館開館50周年記念企画展

喜舎場永珣と資料

2022（令和4）年10月

石垣市立八重山博物館

目　次

あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

　発刊によせて　石垣市教育長・・・・・・・・・・・・1

　開館 50 年周年を迎えて　博物館長・・・・・・・・・・・・2

凡例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第１部　喜舎場永珣（人物）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第２部　喜舎場永珣資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３８

あいさつ

発刊によせて

2022（令和４）年 10 月 18 日、石垣市立八重山博物館は「開館 50 年」の節目の日を迎えます。

この度、開館 50 周年を記念した事業として「喜舎場永珣と資料」の記念講演会と企画展を開催できることを心から嬉しく思います。

開館から 50 年にあたる 2022（令和４）年は、奇しくも喜舎場永珣が亡くなってから 50 年と重なっています。

石垣市教育委員会では、開館してから半世紀という大きな節目の年を迎えるにあたり、これまで博物館活動に関わってこられた方々への感謝と、新博物館建設を見据え歩みを進めていくために、これからも市民や来訪者がより魅力を感じ、より身近な博物館へと繋がる機会となればと 2021（令和３）年に検討委員会を設置して準備を進めてきました。半世紀にわたる博物館の歴史の中で大変喜ばしい出来事のひとつが 2012（平成 24）年の「喜舎場永珣資料」の寄贈であり、テーマを「喜舎場永珣と資料」として、この度、記念講演会と企画展を開催することになりました。

皆さん、ご存知のとおり「喜舎場永珣」は、明治の生まれで若い教員時代に伊波普猷や柳田国男等の研究者と出会い研究に目覚め、その後、八重山の歴史、民俗、古謡などの研究を生涯、八重山の地で展開し、八重山のための八重山文化研究を生涯貫きました。さらに教育者としても多く人材を育て、さらに地域の歴史や文化の大切さを地域の方々へ説き、とくに八重山の文化や芸能の育成に図り知れない影響をあたえました。

また、彼の収集した膨大な資料は「喜舎場永珣資料」と称され、永珣により消滅の危機にあった資料は収集され、幾多の困難を乗り越えながら彼や家族により大切に保管され守られてきたものです。その資料的価値については古くより研究が行なわれており、これらの資料は石垣市の将来に新たな展望を切り開いていく推進力となるものだと、多くの研究者より期待が寄せられています。

本書及び関連した講演会・企画展などの催しでは、永珣の研究や活動、人柄や交流した人々、資料を分野毎に一般の方々にも分かり易い内容で紹介します。

この催しをとおし、石垣市はもとより八重山の誇る貴重な文化遺産の価値について広く一般の方々へ共有する機会となれば幸いです。

結びに、発刊にあたってご教授頂いた先生方をはじめ、資料の提供などでご協力頂いた関係各位に対し厚くお礼を申し上げるとともに、本書及びこの度の催しが今後の博物館の未来を切り開いていく切欠となることを願い、記念冊子発刊にあたってのごあいさつといたします。

石垣教育委員会
教育長　﨑山　晃

開館 50 年周年を迎えて

八重山博物館は祖国復帰記念事業の一環として、八重山諸島の歴史・文化を中心とした博物館として整備が図られ、1972(昭和 47)年 10 月 18 日に開館しました。1983(昭和 58)年３月には沖縄県で２番目の登録博物館となっています。これまで半世紀にわたり「博物館法」に基づき「地域に根ざし、地域に学び、地域へ奉仕する」ことをテーマに市民・来訪者の利活用を積極的に推進しています。

石垣島のみならず、竹富町の島々や与那国島を含む八重山諸島全域を対象として歴史、民俗、美術工芸などの資料を収集し、特色のある密度の高い展示を心がけてきました。

収蔵資料には人間国宝(型絵染)鎌倉芳太郎氏による「八重山蔵元絵師による風俗画稿」・「八重山嶋上布絵図帳」、宮平みつ氏による「かつての八重山のアイナーヨイ(婚礼祝い)を偲ぶ八重山婚礼人形」、宮城信勇氏による「古文書」、久場島清貴氏による「八重山絵師上重要な位置を占める久場島清輝の下絵」、西表信甫氏による「唐人墓碑」、豊川敏彦氏による「豊川善佐宛、中華民国長崎領事からの感謝状」、喜舎場幸子氏による「喜舎場永珣資料」、知念政信氏による「紙本着色東任鐸画像附　教訓十箇条」、沖縄県指定無形文化財技能保持者の新垣幸子氏による「八重山上布　新垣幸子裂帖」などは、特に際立ったものです。その中には国・県・市の文化財として指定されているものも多く含まれます。

また、これまでに 1984（昭和 59）年の沖縄県立博物館の協力による移動博物館『恐竜展』、1991(平成３)年の『アジアの仮面展』、1992(平成４)年の開館 20 周年『琉球王国・大交易時代の八重山展』、2002(平成 14)年の開館 30 周年『王国の工芸展―伝承のわざとこころ―』、2003(平成 15)年の『重要無形文化財「紅型」保持者(人間国宝)玉那覇有公氏の作品展』など多くの催しを開催して、好評を博しました。

教育普及活動においては 1983(昭和 58)年から「こども博物館教室」をスタートし、40 年に亘り継続されています。その他にも一般を対象とした「文化講座」・「体験講座」、子どもを対象とした「こども手作り教室」は定番となり、大変人気のある講座となっています。

このような半世紀の博物館の歴史の中で、特に喜ばしい出来事のひとつが「喜舎場永珣資料」の寄贈でありました。50 年の節目にあたり、「喜舎場永珣資料」に焦点を当てた催し（記念講演会・企画展）を開催できることを大変嬉しく感じています。この催しをとおし、さらなる博物館活動の充実へと繋がっていくことを切に願います。

末筆となりましたが、これまでの石垣市立八重山博物館への皆さまのご理解とご協力に深く感謝申し上げるとともに、今後も長年蓄積された八重山の歴史や文化を楽しくわかり易く伝え、幅広い年齢層の市民の皆さまをはじめ、訪問される多くの方々にも「親しまれる」博物館を目指して参りたいと考えていますので、これからも温かいご支援とご協力を頂きますことを祈願して、記念冊子発刊のごあいさつといたします。

石垣市立八重山博物館
館長　砂川　栄秀

凡　例

1．　本書は、開館 50 周年の記念事業（記念講演会・記念企画展）の「喜舎場永珣と資料」についてまとめた記念冊子です。

2．　本書は石垣市立八重山博物館大濵永寛が與座可奈恵の協力を得て、次の書物の内容を中心に一般にわかり易いように表現等の一部を修整及び加筆してまとめました。

第１部　喜舎場永珣（人物）

・喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会　牧野清・石垣繁編
『甘きいずみ―喜舎場永珣生誕百年記念誌―』（1991 年　南西印刷）

・三木健『八重山研究の人々』（1989 年　ニライ社）

第２部　喜舎場永珣資料

・石垣市教育委員会『喜舎場永珣資料調査報告書』（2018 年　八島印刷）

3．　本書を作成するにあり第１部は石垣繁氏に、第２部は石垣市教育委員会 2018 年『喜舎場永珣資料調査報告書』で各分野の執筆した諸氏に内容を確認して頂き、ご指導・ご助言頂いた後に全体の内容を名桜大学特任教授波照間永吉氏の指導・助言を頂きまとめました。次に五十音順に氏名と担当したテーマについて記し、深く感謝申し上げます。

石垣　繁　　（喜舎場永珣生誕百周年記念事業　事務局長）
第１部　人物

大田　静男　（石垣市立八重山博物館協議会長）
第２部　音声資料及び新聞資料

砂川　哲雄　（元石垣市立八重山博物館協議会委員）
第２部　資料の概要、スクラップ資料

田本　由美子（喜舎場永珣調査会委員）
第２部　写真資料

波照間　永吉（名桜大学特任教授）
本書全般及び第２部　調査ノート資料

宮良　芳和　（石垣市立八重山博物館協議会委員）
第２部　文書資料、証書・辞令書資料

山根　頼子　（石垣市立八重山博物館協議会副会長）
第２部　図書資料

4．　本書で使用した写真の一部は、石垣博孝氏（元石垣市立八重山博物館協議会長）、那覇市立歴史博物館、石垣市史編集課より使用について許可を頂き掲載した。記名し感謝申し上げます。

5．　本書に掲載された資料は、とくに記載のない限り、石垣市立八重山博物館に所蔵された資料です。

第１部「喜舎場永珣」（人物）

①　永珣の生い立ちと若き教師時代の人柄

喜舎場永珣は、1885（明治 18）年 7 月 15 日、父永清、母ヲナリムイの長男として石垣市字登野城（当時の八重山大浜間切登野城村）で誕生しました。永珣の生まれた年は琉球藩を廃止し、沖縄県が設置された廃藩置県（1879 年）から６年後で、八重山蔵元内に新しい役場が置かれるなど、近代社会へと変化して間もない頃でした。

父永清は、長崎第五高等中学医学部を卒業した後、沖縄県立病院へ勤務、永珣が８歳のときに結核（過労と栄養失調）のため 30 歳という若さで亡くなりました。そのため永珣には兄弟はありませんでした。永珣は父の顔も覚えていなかったとされていますが、写真が一枚残っています。

父永清没後の喜舎場家の家計は極度に苦しかったようです。しかし、気丈（きじょう）な母に育てられ八重山島高等小学校を卒業、後に沖縄の教育や文化面において各界で活躍した宮良長包（八重山出身）、金城善助、比嘉春潮、島袋源一郎などと同じ頃に沖縄師範学校簡易科で学び 1905（明治 38）年に卒業、帰郷して母校の大川尋常小学校で教鞭をとることになります。

青年教師の頃の永珣は、気骨稜々（きこつりょうりょう）、体格は大きく、相撲が強く、堂々たる偉丈夫（いじょうぶ）の青年教師で、天性の抜群の記憶力を持ち合わせ、万事頑固ともいえる厳しさと容易に妥協しないという強い性格だったとされています。

父　永清（寫真）　写真番号 313

母　ヲナリムイ　写真番号 254

卒業証書（八重山島高等小学校）
証書・辞令書等資料 9

卒業証書（沖縄県師範学校）
証書・辞令書等資料 11

免許状（小学校教員）
証書・辞令書等資料 12

エピソード　ー竹富島での断髪事件の話ー

1896（明治 29）年、永珣が大川尋常高等小学校４年（11 歳）の時、全校生徒一同による竹富島見学がありました。日中は島の浜辺で相撲を取り、運動会といって駆けっこを行いました。その日は、クタクタとなった生徒達へご馳走が振舞われ一泊しました。夜半、生徒たちが眠ったころ、先生が生徒の髪を鋏（はさみ）で切り落とし生徒たちを坊主へとしました。翌朝、生徒たちは自分が坊主になったことを知り、みな泣いて家に帰ったとされます。これはいわゆる学校生徒の断髪（だんぱつ）事件（騒動）とされています。

後の 1903（明治 36）年には八重山地方断髪令（一般）が施行されました。

※喜舎場永珣生誕百年記念論文集『八重山文化論叢』1987（昭和 62）年の長男永浩の執筆を参考に一部を読者が理解し易いように加筆、修整した。

エピソード　進学への熱い思い

永珣は 1900（明治 33）年に 16 歳で八重山島高等小学校を卒業し、その後、沖縄県師範学校へ進学したいと祖父に相談します。しかし、祖父は自分の子（永清）を旅先でなくしたこともあり孫だけは自分の手元にと反対します。結局、校長先生の紹介で八重山島庁へ勤めることになりました。しかし永珣は向学心を抑えることができず、僅かな給料（当時日給 10 銭）の内、半分を祖父（家庭）にあげ、残りの半分をひそかに貯金して進学の準備にいそしみました。

1903（明治 36）年、永珣 19 歳の時、祖父に内緒で師範学校の入学試験を受験し見事に合格します。しかし、そのことを知った祖父は烈火（れっか）のごとく怒り反対しました。しかし、親戚の方や校長先生の説得もあり、やっと祖父も許可し入学することができました。

※喜舎場永珣生誕百年記念論文集『八重山文化論叢』1987（昭和 62）年の長男永浩の執筆を参考に一部を読者が理解し易いように加筆、修整した。

②　研究への目覚め

1906（明治 39）年、文部省は日本全国の民謡の調査を実施します。当時の校長であった大濱用要先生が文部省より依嘱（依頼）された俗謡（民俗）の調査を喜舎場永珣に命じました。担当に指名された永珣は、貧乏くじを引いたと残念がり、職員控え室でどのように処理してよいかわからず震えていたとされます。しかし、彼は二週間ばかり駈足（かけあし）式に先輩古老を尋ねまわり調査書を提出して、ひととおりのことを成し遂げました。これが偶然にも彼の琴線に触れるものが合ったようで、永珣ははじめて古謡に関する興味をおぼろげながら持つようになりました。その後、彼の運命は一つの方向へ向うように研究の道へと突き進んでいくことになります。

時代は日露戦争後で、日本本土では柳田国男が日本民俗学の先駆者として、その開拓研究に心血を注ぎ、次第に日本中へ胎動拡散しはじめ、また、沖縄でも伊波普猷が東京帝国大学文学科言語学専修を卒業して帰郷、南島研究の急務を唱導（しょうどう）していた頃でした。

この頃に日本本土や沖縄の先駆をなした学者・研究者が、続々と八重山諸島の調査へ来島しています。永珣は彼らと交流を深めていきました。彼らは若い永珣を温かく指導し、時には激励すると共に多くの調査を依嘱し協力を求めました。永珣もまた、学問の道における必要な知識を吸収し、彼らとの交流をとおし次第に視野を広くし、人間としてのスケールを大きく持つように成長して行ったといわれています。

ところで教員となった永珣は、大川尋常小学校を皮切りに、平得、大川、川平、白良（白保・宮良）登野城、西表、石垣、大浜などの各小学校を歴任して、その内の長い期間を校長として勤務しました。永珣は教育者としても後に早稲田大学総長を努めた大浜信泉や言語学者の宮良當壯、『八重山生活誌』の著者である宮城文、長編叙事詩『オヤケ・アカハチ』の作者である伊波南哲など数多くの才能のある有為な人材を育てました。

その一方で、1905（明治 38）年の平得尋常小学校に訓導兼校長として赴任した際には、伊波普猷の「教育家は郷土の研究が第一歩」という言葉どおり、毎晩、各戸を歴訪して平得村の民俗調査を手がけます。1909（明治 42）年に川平尋常小学校の校長として赴任した時も、平得での手法を用いて古謡の採取、伝説等の調査、研究を行い、川平の節祭の行事の次第や神言葉（ロ）の記録などを進め、当時の新聞紙上に歴史、文化（古謡、祭祀）などに関する投稿を行っています。

教員時代の写真　1929（昭和 4）年３月　写真資料 201

教員時代の写真　1929（昭和 4）年３月　写真資料 200

エピソード　－子ども達を学校へ（出席率を上げろ）－

1907（明治 40）年に平得尋常小学校は、はじめて独立校となりました。永珣は訓導兼校長として同校に赴任します。独立校として発足したものの当時の父母は、学校教育に対する認識は全くなく、子ども達は朝早くから父母とともに野良仕事に出かけ、学校への出席者はほとんどなく学校は空家同然であったようです。永珣がいくら父母に相談しても聞き入れてもらえず、いくら知恵を絞っても良い考えは浮かばない日が続きました。

そこで思い出したのが伊波の「教育家は郷土の研究が第一歩」という言葉でした。その言葉どおりに毎晩各戸を歴訪して、平得のユンタ・ジラバ、アヨウの調査をはじめ、３ヶ月ほどすると父兄（父母）達と親密になり、頃合をみて相談したところ父母達は、子ども達が学校へ行くことに承諾してくれました。そこで登野城校より、古いオルガンとフットボールを借り受けて、教育したところ子ども達の学校への出席率は急上昇したとされます。

※三木健著『八重山研究の人々』1989（平成元）年を参考に一部を読者が理解し易いように加筆、修整した。

エピソード　ーオヤケアカハチに関する新しい見方の話ー

若き郷土研究家であった永珣は、決して調査研究にのみ没頭したわけではなく、英才教育をモットーとして情熱と迫力をもって子ども達の教育にあたりました。授業の４、５分間は郷土史の中の神話、民話、芸能、偉人伝について取り上げ子ども達へよく話し、子ども達の学習意欲の喚起（かんき）に努め、教え子の個性を伸ばし、かくれた才能を引き出すために懸命であったとされています。

ある日、これまで琉球王国に反逆し、国賊とされてきたオヤケアカハチについて新しい見方を子ども達へ話して聞かせました。

「アカハチは正直で真面目な百姓の若者であったが、琉球王国の言語に絶する酷使（こくし）と搾取（さくしゅ）、さらに信仰への弾圧に耐えかねて、ついに島民解放のために立ち上がりました。（戦いには敗れたものの）庶民の英雄でした」と述べたとされます。

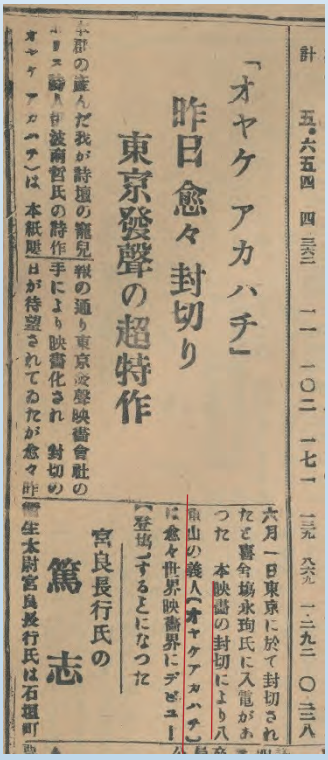
登野城尋常小学校５年生のときに永珣の受け持ちとなり、指導を受けた伊波南哲は、師（永珣）のことばに触発され後年、長編叙事詩『オヤケ・アカハチ』を著しました。教え子の出版は、永珣にとって大変うれしかったようで、炎天下の中、日よけのこうもり傘をさし、小わきに『オヤケ・アカハチ』の本を抱え、関心のありそうな方に「これを買って読みなさい」と売り歩いたとされています。

現在、琉球史の中では「オヤケアカハチの乱」として逆賊とされていますが、八重山を中心とした歴史の本の中では「オヤケアカハチの事件」或いは「オヤケアカハチの戦い」と記述されています。

その後、「オヤカアカハチ」は、伊波南哲の本を元に映画化されています。1937（昭和 12）年６月２日の『海南時報』では「八重山の義人（オヤケアカハチ）は愈々（いよいよ）世界映画会へデビュー」と記されています。

※喜舎場永珣生誕百年記念論文集『八重山文化論叢』1987（昭和 62）年の長男永浩の執筆を参考に一部を読者が理解し易いように加筆、修整した。

伊波南哲一家　1936（昭和 11）年　写真資料　199



「オヤケ アカハチ」
昨日愈々封切り
東京發聲の超特作

宮良長行氏の
篤志

オヤケアカハチの映画に関する記事
1937（昭和 12）年６月２日『海南新報』
新聞資料より

③－１　調査・研究をとおし交流した人々

廃藩置県後、日本国の一地域となった八重山には、早くから本土の文化人や研究者が訪れました。1900 年以降から太平洋戦争前には柳田国男、伊波普猷、真境名安興、鎌倉芳太郎、柳宗悦、折口信夫、東恩納寛惇、大島広、須藤利一などが、戦後には金関丈夫、西村朝日太朗など、歴史・民俗・音楽・美術・考古などの分野における多くの著名な学者（研究者）が調査に来島しました。その中でも永珣は伊波普猷、柳田国男から格別な影響を受けたといわれています。

伊波普猷は 1907（明治 40）年にはじめて八重山を訪れ、１ヶ月滞在し八重山の民謡、土俗（民俗）、言語の研究調査をしました。その時、永珣が校長先生より道案内役を命ぜられました。案内の際には時々、伊波より色々な質問がありましたが、その質問に永珣にはいくら頭を叩いても答えられる筈（はず）もなく、口をつぐんでしまったようです。また、伊波は滞在中に沖縄の歴史について講演しました。その講演で伊波は 23 歳の当時駆け出しの教育青年としての永珣らに向い「郷土化しない教育は、砂上の楼閣（ろうかく）も同様だ」と強い警告を発して激励し、教育家は郷土の研究がその一歩であることを教諭したとされます。那覇へ戻った伊波は直（す）ぐに『琉球国由来記』などの写本を送り、永珣の郷土史研究を応援しました。後に永珣はその時のことを振り返り「私の郷土史研究への種子は、正しくその時、伊波先生によって蒔（ま）き下ろされた」と述べています。

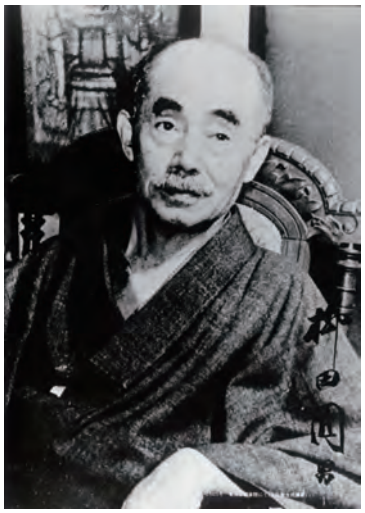
また、伊波が訪れた 1907（明治 40）年の陽春（ようしゅん）の頃より永珣は古文書の収集を開始しています。

その後、伊波は 1911（明治 44）年に沖縄県立図書館長へ就任し、1912（明治 45）年の年始にかけて再び八重山を訪れて八重山民謡の収集を進めました。その時、伊波はとくに「鷲ぬ鳥節」の作者や年代について調査するように永珣へ依頼しました。

依頼を受けてからの永珣は四箇村の長老を訪ね回り、３ヵ月をかけて字大川の仲間家の初代司サカイが製作者であることを突き止め、早速、那覇の伊波普猷宛に手紙で報告しました。報告を受けた伊波の喜びはこれまた、ひとしおであったようです。永珣が苦労して探し求めた作者でしたが、後の 1961（昭和 36）年に八重山の郷土研究を続けていた宮良賢貞により作者は川平の英傑仲間満慶の妻サカイであり、さらに原歌「バシユンタ」の「バシ」は、鳥の鷲ではなく、船のことで、鷲は比喩であるとの新説が唱えられました。それに激怒（げきど）した永珣は 1962（昭和 37）年１月 20 日から６回にわたり『八重山毎日新聞』で反論しています。

永珣が柳田国男とはじめてあったのは 1921（大正 10）年１月下旬に彼が八重山の民俗採集のために来島したときでした。当時、37 歳で石垣島の白良尋常小学校の校長をしていた永珣は、石垣島測候所

伊波普猷と喜舎場永珣
（那覇歴史博物館提供）



柳田國男
（那覇歴史博物館提供）

八重山島民謡誌　写真資料 207

長岩崎卓爾と共に彼を迎え、一週間の滞在期間中には、彼に同行して字大浜の御嶽や宮良殿内、桃林寺、古文書、旧記などが保管されている各家を案内しました。滞在中のある日、自宅を訪ねてきた柳田に味噌汁をご馳走して、自らまとめた八重山民謡の原稿を柳田へ見せました。柳田は「日本の学界へいち早く紹介すべき貴重な資料だ」と発表を勧めますが、永珣は未完成だからと強く断ります。しかし、「世の中に完成という文献は一つもない」との柳田の言葉により、永珣がはじめての刊行物としてまとめたのが 1924（大正 13）年に発刊された『八重山島民謡誌』でした。

このように著名な学者・研究者との交流をとおし、永珣はかくして八重山の歴史、民俗研究において教職に身をおきながら、岩崎卓爾とともに八重山諸島におけるこの分野を代表する研究者として、次第に頭角を現していきました。

しかし、当時の社会は、古い昔の歌や話、言葉、習俗、信仰などの研究が、学問的価値を持つものとは誰も考えていない時代だったこともあり、「喜舎場永珣先生はよほど物好きだな」と、周囲からは変わりもの扱いをされていたようです。

鎌倉芳太郎、岩崎卓爾、喜舎場永珣
（石垣博孝氏提供）

伊波普猷宛て喜舎場永珣書簡
（那覇歴史博物館提供）

小話　―古文書消滅の危機―

永珣の古記録（古文書）の蒐集（しゅうしゅう）は伊波の影響を受け 1907（明治 40）年の陽春の頃より始まりました。その動機は八重山の郷土史を研究するにあたり貴重な古記録が基礎的史料であったからです。

当時、これらの古記録（古文書）は、八重山の行政庁であった八重山蔵元（くらもと）や 1879（明治 12）年の沖縄県の廃藩置県により誕生した八重山島役所、各村にあった番所（俗にオーセー）、民間で保管されていました。

1897（明治 30）年に八重山蔵元が廃庁となると、古記録（古文書）の全部が、石垣村役場に引継がれました。しかし、新制度によって誕生した役場では、この旧制度の古記録は事務の上では直接必要がなく、保管は放置状態となり、次第に散逸（さんいつ）して民間に保管されるようになりました。このように民間に散逸した古記録（古文書）を永珣は各戸を訪問して蒐集しました。

彼がこのようにして残した古文書は後の 1960（昭和 35）年にハワイ美術館長のジョージ・H・カー博士の努力によりマイクロ写真紙焼本（以下、「マイクロ本」と略記）として複写され、遠く海洋を渡ってハワイ美術館をはじめ、早稲田大学、琉球大学で保管、研究、活用されていきました。右の写真は永珣が苦労して蒐集した沢山の古文書と共に撮影されたものです。

喜舎場永珣とジョージ・H・カー博士
1960（昭和 35）年　写真資料 221

③－２　永珣が影響を受けた地元で活躍していた２人（岩崎卓爾と大浜用能）

地元で活躍し若い永珣へ大きな影響を与えた２人の人物がいました。

その一人が石垣島測候所の所長を務めた岩崎卓爾です。彼は、仙台藩（宮城県仙台市）の生まれで、中央気象台（現・気象庁）へ入庁し研修生として根室、札幌などの測候所に勤務した後に 1898（明治 31）年より中央気象台付属石垣島測候所に配属となりそれ以降死去するまでの 40 年間を石垣島で過しました。岩崎は、晩年には「天文屋の御主前（テンブンヤーヌ　ウシュマイ）」と呼ばれ地域の方々に親しまれました。

彼は仕事の関係上、気象関係を専門としていましたが、いち早く八重山の動植物をはじめ、歴史、民俗、文化などの幅広い分野に関心を持ち、日本の中央学界の事情に通ずる面もあり、それらについて日本本土へ紹介していました。彼は熱心な永珣の人柄を愛し、永珣もまた岩崎のことを尊敬していたとされます。岩崎卓爾の『ひるぎの一葉』の出版の際には、「喜舎場天與」のペンネームで八重山民謡十一編を献呈しています。また、1934（昭和９）年の岩崎卓爾の胸像建立の際には顕彰文の起草を担当し、除幕式では電報の朗読を行いました。

1934（昭和９）年には、岩崎卓爾、喜舎場永珣、瀬名波長宣、宮良賢貞などにより「八重山郷土研究会」が発足しました。岩崎が初代会長を務め、指導にあたり、５年後（1940（昭和 15）年）には、永珣が会長を務めています。もう一人が 1897（明治 30）年の八重山蔵元廃止時に最後の石垣頭職を務めていた大浜用能です。彼は周囲から「イシャナギドゥヌジィヌウシュマイ」と尊敬されていました。人格、識見とも高く、とくに芸能面に豊富な知識を持っていたとされます。彼もまた永珣をこよなく愛していました。後に永珣は彼について「旧蔵元の高位高官の先輩方のお宅に殆ど毎晩のように訪問して、古文書や旧記、古記録などの読み方もこれら先輩方から教えて頂きました。なかでも私が接したこれらの役人うちで最もずば抜けて頭脳明晰（ずのうめいせき）貫禄充分な印象深いのが大浜用能翁でありました。翁は私が毎晩訪れて様々な昔話や古記録のことを質問するので、最後は何時も笑って「君はどうして学問きちがいになっているのか（ワアヤ、ノウデアンヂ学ブリバシイリャ）」と言いながら色々な貴重な旧来の習俗を教えてくださいました」と残しています。

石垣島測候所と岩崎卓爾
（那覇歴史博物館提供）

『ひるぎの一葉』　図書資料 19
表紙裏に「恵存　天与殿　九ノ五月端

田代安定の八重山訪問の際
1906（明 39）年１月　大浜用要宅
右から大浜用要、田代安定、岩崎卓爾
（石垣市市史編集課提供）

エピソード　－八重山芸能の素晴らしさを全国へ郷土舞踊民謡大会－

1928（昭和３）年に日本青年館で開かれた郷土舞踊民謡大会に招待されたのは、柳田の働きかけによるものであったとされています。その時、八重山芸能団の監督者（代表）を務めたのは永珣でした。参加には、演者は素人の娘に伝授させ出演させること、服装はあくまでもそのままのもの（行事で使用しているもの）を使用することなどの厳しい条件がつけられていました。当時の八重山の士族の娘たちの中には舞踊を稽古（けいこ）しているものはほとんどおらず、メンバー集めにはとても苦労したようです。やっとのことで 14 名のメンバーを揃（そろ）え、いざ、東京へという時にも八重山芸能団が県代表として上京することに不満を持った沖縄本島の舞踊関係者からの阻止運動に遭（あ）いました。那覇へ着いてからも古典芸能の代表者により試演会を開くように求められ、途中での試演会は禁止されているからと断るものの、結局、説得され、やむなく試演会に応じることになりました。この試演会は、はじめからアラ探しのための批評が目的であったため「技術が未熟」、「服装が古臭（ふるくさ）いから中央では物笑いになる」など罵倒（ばとう）が浴びせられます。それまでじっと我慢して耐えていた永珣でしたが、ついに我慢できず立ち上がり「諸君は、日本青年館が、とくに八重山芸能に白羽の矢を立てた。素朴（そぼく）な郷土芸能の趣旨（しゅし）と注意事項についてご存知ですか。それがわかっていれば、このような的はずれの批評はしないはずです」と落雷（らくらい）のように一喝（いっかつ）しました。その後、会場は静まり返り、みな徐々に引き揚げていったとされます。

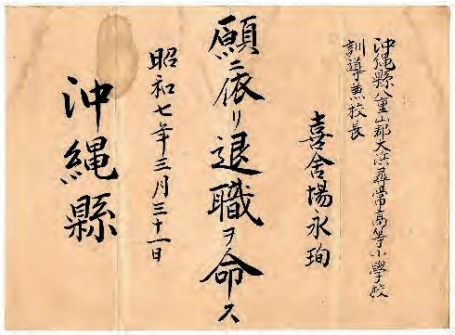
八重山芸能団の上京には、このように心ない人たちの妨害に遭い永珣を苦しめました。しかし、東京での公演は大成功に終わり、さらに朝日講堂での特別講演も開催されました。

※三木健著『八重山研究の人々』1989（平成元）年の内容を参考に一部を読者が理解し易いように加筆、修整した。

日本青年館主催「第３回郷土舞踊民謡大会」1928（昭和３）年４月
八重山民謡舞踊「東京紀行と八重山芸術」スクラップ資料４

④　研究へ没頭

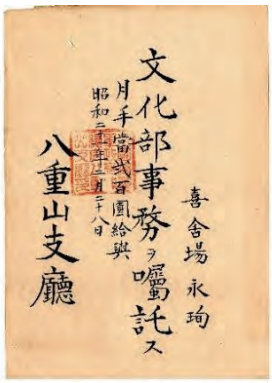
永珣は40代に入ると恩給で生活ができるようになりました。東京での八重山芸能公演で自信をつけた永珣は、1932（昭和 7）年 48 歳の時に大浜尋常小学校の校長を最後に、研究に専念するために依願退職して本格的に八重山研究に専念することになります。決して経済的には恵まれていたとはいえませんでしたが、太平洋戦争が終結する以前には、登野城字会長をはじめ、石垣町社会教育委員、八重山神社建設委員などの各種委員を務め、戦後の米軍施政下やその後の 1947（昭和 22）年からの八重山民政府へ移行してからも八重山文化部事務、公立八重山中等学校郷土史教授の他、文化財専門審議会専門委員などの各種委員・調査員を務め、多種の方面に寄与（貢献）する一方で、80 代で生涯を終えるまで研究に没頭し続けました。



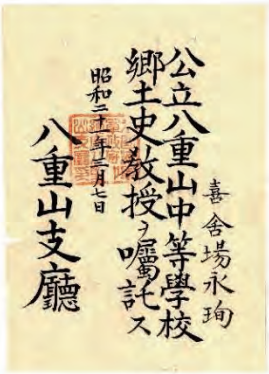
退職辞令〔1932（昭和 7）年〕
証書・辞令書等資料 117

委嘱状（石垣町社会教育委員）
〔1934（昭和 9）年〕
証書・辞令書等資料 118

委嘱状（八重山神社建設奉賛会委員）
〔1940（昭和 15）年〕
証書・辞令書等資料 131



委嘱状（文化部事務）
〔1946（昭和 21）年〕
証書・辞令書等資料 143

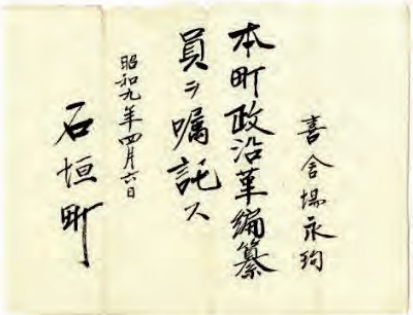


委嘱状（公立八重山中等学校郷土史教授）
〔1946（昭和 21）年〕
証書・辞令書等資料 144

委嘱状（文化財専門審議会専門委員）
〔1954（昭和 29）年〕
証書・辞令書等資料 155

永珣は、教職を退職して以降、多くの論文や書籍を刊行しています。

1935（昭和 10）年、49 歳の時の石垣町施行 10 周年の際には、山口町長より「本町政沿革編纂員」として委託され、はじめて八重山の歴史をやや体系的に記述した『石垣町誌』をまとめあげました。同年 12 月 1 日の『海南新報』の記事では、「朗報……郷土研究家喜舍場永珣が 20 年以上の蓄積を傾けて成れるもの」と讃えています。しかし、永珣にとって内容は不十分だと感じていたようで、「他日、八重山史の誕生と共に増訂、面目を改め、以て読者に再会する覚悟である」と強い意欲を示しました。



委嘱状（本町政沿革編纂委員）
1934（昭和 9）年
証書・辞令書等資料 119

太平洋戦争後の 1951（昭和 26）年には、八重山群島政府の依嘱を受け執筆し、1954（昭和 29）年に『八重山歴史』が出版されました。これは校正が不十分だったこともあり誤植だらけで、永珣は非常に不満で自ら 51 頁に及ぶ誤植表を印刷して配布したとされます。

1967（昭和 42）年には、『八重山民謡誌』を刊行しました。当時、八重山の社会では、芸能に関する関心が高く、これは八重山の芸能の発展に計り知れない役割を果たしたとされています。

1970（昭和 45）年には、『八重山古謡』（上・下）を沖縄タイムス社より出版します。236 の歌を収録した 1,283 頁に及ぶ実に膨大なものでした。彼は収録されている歌を八重山における万葉『おもろさうし』と称すべきものであるとし、1906（明治 39）年に文部省により開始された「おもろ」の編集事業が３回で打ち切られ、予定されていた宮古、八重山の収録が叶わなかったことに反発して、これまでに自らの手で蒐集し続けた古謡に心血を注いで解説を加え、八重山の歴史、民俗、言語、信仰などの豊富な内容でまとめたもので、まさに時代とともに消え行く、人から人へと伝えられる古謡や古文書などの資料を記録し或いは集め、戦時中は必死に守りぬくなど、茨の道と言うべき中をとおりながら研究した 60 年の執念の成果でした。

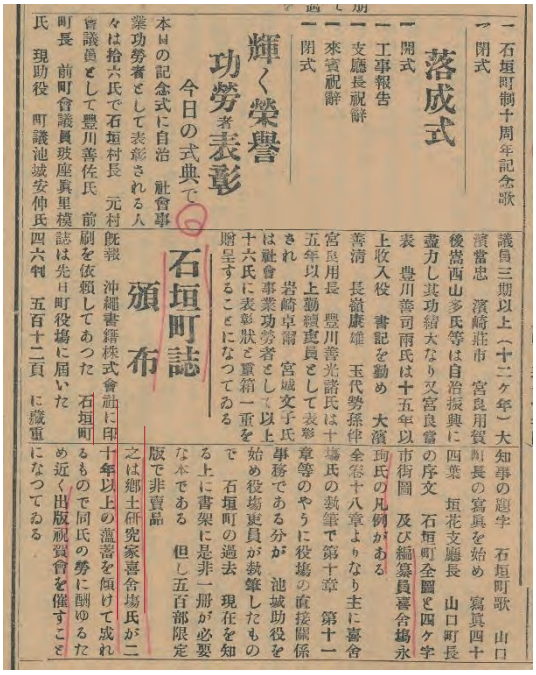
翌年には、実に広汎且繊細を極めたものであり学問的価値は全く他に比肩すべきものがないとして、日本民俗学会は研究者にとっては最高の名誉である第４回「柳田賞」を贈り、長年の苦労を称えました。

「柳田賞」の決定は、従来、右往左往することが多かったようですが、永珣の『八重山古謡』は異例の満場一致という、全選考委員の賛同をもって決定されたとされています。また、この賞が中央を離れて、遠い地の研究者へ贈られたことも、非常に異例であったと言われています。

授与式には、永珣は高齢であったため医師の指示により自らの出席を見送り、代ってご令孫の喜舎場一隆氏が参加しました。

永珣が逝去して５年後の 1977（昭和 52）年には『八重山民俗誌　上下』が沖縄タイムス社より刊行されました。

『石垣町誌』復刻版
1935（昭和 10）年国書刊行会



一 石垣町制十周年記念歌 山口
一 開式 濱崎莊市 宮良用賀 知事の題字 石垣町歌 山口 寫眞四十 議員三期以上（十二ケ年）大 寫眞の寫眞を始め 垣花支廳長 山口町長 濱當忠 後嵩西山多氏等は自治振興に盡力し其功績大なり又宮良當の序文 石垣町全圖と四ケ字表 豊川善司氏は十五年以市街圖 及び編纂員喜舎場永 上收入役 書記を勤め 大濱 珣氏の凡例がある 善清 長嶺康雄 玉代勢孫伸 全巻十八章よりなり主に喜舎 宮良用長 豊川善光諸氏は十 場氏の執筆で第十章 第十一 五年以上勤續表員として表彰 章等のやうに役場の直接關係 され 岩崎卓爾 宮城文子氏 事務である分が 池城助役を は社會事業功勞者として以上 始め役場表員が執筆したもの 十六氏に表彰狀と賞箱一重を で 石垣町の過去 現在を知 贈呈することになつてゐる る上に書架に是非一冊が必要 な本である 但し五百部限定 版で非賣品

落成式
一 開式
一 工事報告
一 支廳長祝辭
一 來賓祝辭
一 閉式

輝く榮譽
功勞者表彰
今日の式典で
本日の記念式に自治 社會事業功勞者として表彰される人々は拾六氏で石垣村長 元村 既報 沖縄書籍株式會社に印 議員として豊川善佐氏 前刷を依頼してあつた 石垣町 町長 前町會議員 玻座真里模 誌は先日町役場に届いた 氏 現助役 町議池城安伸氏 四六判 五百十二頁 に嵩重 になつてゐる

石垣町誌
頒布
之は郷土研究家喜舎場氏が二十年以上の溫醞を傾けて成れるもので同氏の勞に酬ゆるため近く出版祝賀會を催すこと

「石垣町史頒布」『南海新報』
1935（昭和 10）年 12 月 1 日　新聞資料

『八重山古謡』（上・下）
1970（昭和 45）年　沖縄タイムス社

第 23 回日本民俗学会年会記念写真　1971（昭和 46）年　写真資料 205
※写真中央が孫の喜舎場一隆

⑤　信念と歴史観

琉球王府が解体し、旧慣（きゅうかん）の社会体制が色濃く残る 19 世紀後半に生まれた永珣。徐々に旧慣温存（きゅうかんおんぞん）策が撤廃（てっぱい）されていく中で、若い教員時代に伊波や柳田と出会い研究に目覚め、激励を受けながら、多くの方々と交流し大きく成長しました。大正から昭和にかけての社会情勢の変化、太平洋戦争の開戦から終戦へいたる激動の時代、さらにアメリカ統治下など、時代の変化とともに消滅しようとしている古文書や八重山古謡を精力的に収集・採取し、古謡を住民が口から耳へ、耳から口へ伝承してきたいわゆる文字なき庶民階層の生活誌として、それは八重山の精神文化の遺産と言うべき貴重な文献であると考え（位置づけ）ました。未来を見据えて新聞資料の収集も行いました。

彼はそれらを基礎資料として長年の研究を貫き、琉球史に浮き彫りにされてこなかった八重山の庶民の立場に立った歴史観へと辿り着きました。これらの歴史観は、今でも八重山の歴史や文化を考えていく、或いは、見直していく上で基礎となっています。

とくに八重山の歴史においては次の４つのことが大きな影響を及ぼしたと述べています。

１．人頭税という悪制度による搾取（さくしゅ）

２．強制移住政策による新しい村づくり

３．台風とマラリアの被害

４．明和の大津波

⑥　その評価

永珣は約 60 年以上の八重山の文化・歴史に関する調査、研究をとおし、多くのことについて発表しましたが、生前、心血を注いでまとめあげた 1970（昭和 45）年の『八重山古謡』（上・下）は、まさに永珣が突き止めた執念の結晶だといえ、柳田賞が贈られます。

郷土史研究家の砂川哲雄氏は、永珣について 1985（昭和 60）年９月 20・21 日の『沖縄タイムス』に「強烈な個性の出現は八重山近代史の上でも特筆すべきことであり、彼の仕事によりそれまで長い歴史の暗渠を流れていた無名の八重山の人々の生き様が、はじめて確かな形（相貌）をもって現在に浮上することができた」と評価し、「私たちは自らの歴史や文化について内省し、その価値について認識するようになった」と加えています。

さらに、生誕百年事業の期成会事務局長を務めた石垣繁氏は、永珣について 1985（昭和 60）年９月 16・17 日の『琉球新報』に「喜舎場翁ほど八重山を研究し、そして教育の郷土化をこころみた教育者はなかろう」とし、「八重山の土地に立ち、八重山の土に親しみ、八重山の薫りを嗅ぎ、土を掘りつづけたまれに見る偉人である」と加えています。

このように永珣が時代の変化と共に茨の道ともいうべき中を辿り貫き通してきたことは、決して誰もが真似することができるものではありません。喜舎場永珣は、まさに「八重山研究の父」と呼ばれるような偉大な人物でありました。

次の３つの功績はとても大きいと考えます。

１．　教育者として子ども達の個性を伸ばし、かくれた才能を引き出すための懸命な教育に努め、多くの人材を育成した。加えて地域活動においても、地域に寄り添い、密着して関わり、地域の歴史・文化の大切さや重要性を地域の方々へ説いた。とくに八重山文化や芸能の育成発展に測り知れない影響を与えた。

２．　八重山から外の世界を見るという視点に立ち、八重山の歴史・文化を体系的にまとめ上げ、八重山から外の世界をみることの重要性を知らしめた。

３．　時代の変化とともに消え行く、或いは、変化して行く資料の収集の重要性を強く感じ、その収集に努め、個人・家族の協力を得ながら保管を徹底し、後世への貴重な資料（プレゼント）として残した。

喜舎場永珣　1963（昭和 38）年　写真資料５

第２部　喜舎場永珣資料

第１部では喜舎場永珣について紹介しました。第２部では彼が残した「喜舎場永珣資料」を分野ごとにこれまでに分かっていることや、これからの利活用に向けての展望に触れながら紹介していきます。

①　資料の概要

2012（平成 24）年に故喜舎場永珣の遺族から 2,938 点の資料が石垣市立八重山博物館に寄贈されました。この寄贈は八重山博物館が開館して以来、とても喜ばしい出来事のひとつでありました。その資料は「喜舎場永珣資料」と呼ばれており、喜舎場永珣自身の著作（単著、雑誌論文等）、研究調査ノート、人物・芸能・風景などの写真、手紙・はがきなどの書簡類に加え、自ら購入したものや寄贈を受けた書籍などで構成されています。

この「喜舎場永珣資料」は、八重山博物館が寄贈を受ける前に沖縄県教育委員会文化課編（1976）『古文書等緊急調査報告書』（沖縄県文化財調査報告書　第５集　昭和 48・49・50 年度）や喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会編（1985）『喜舎場永珣生誕百年記念　研究資料展示目録』で目録化され、研究者により注目されていました。さらに寄贈を受けて石垣市教育委員会編（2018）『喜舎場永珣資料調査報告書』で最新の目録化が行われています。石垣市教育委員会編（2018）では、2,938 点の資料の内、2,384 点を９つの項目に大分類しています。

資料は、八重山の歴史・民俗・芸能・歌謡・言語など多岐の分野にわたり、八重山研究のさらなる発展に必要となる重要なものが数多く含まれています。寄贈を受け、これまでに新聞の修復作業が行なわれ、保存と活用に向けてデジタル化を実施しています。しかしながら資料の多くの分析、研究はこれからです。今後の調査・研究をとおして次のことに貢献できると大きな期待が寄せられています。

① 八重山研究の父とも呼ばれる喜舎場永珣の思想と人物に対する研究をさらに深めることができる。
② 著作そのものの歴史的、学問的評価を含め、その研究成果を支えた多くの調査ノート・メモ類・草稿などの分析により、喜舎場永珣の研究のプロセスを知ることができる。
③ 230 点余りにのぼる調査ノートは、八重山文化研究にとって非常に価値のあるものであり、今は失われた八重山各地の民俗と文化の研究にとって必須の記録である。
④ はがき・書簡類により喜舎場永珣の八重山内外の研究者や知人たちとの交流を知ることができる。
⑤ さまざまな音声資料や数多くのスナップや風景写真、レコード、録音テープなどによって八重山の芸能研究、民俗地理学的研究、言語研究の上でも新たな発見と深化が期待できる。

エピソード　資料を守り抜け－資料と再会して男泣き―

永珣が、長年かけて苦労して収集した資料ですが、その保管には並々ならぬ苦労がありました。

1944（昭和 19）年７月６日に南洋諸島のサイパン島の日本軍が玉砕すると、戦局は日に日に悪化し、1945（昭和 20）年６月１日、八重山群島を守備していた旅団司令部は「一般住民は６月 10 日までに軍の指定地まで避難せよ」と軍命を発しました。

この軍命を受け永珣も於茂登岳のふもと白水へ避難することになります。しかし、家にある何十年もかけて集めた古文書や民俗資料をなんとしても守り抜かねばならないと永珣は決心しました。保存には家の裏にあるコンクリートの豚舎内に保管するのが一番安全だと、豚舎内に箪笥２つを運び、その中に資料を詰め込み、雨戸やクロツグの葉などで覆いロープで固定して、永珣は祈りの言葉を神にささげて資料と別れたとされます。永珣が白水に避難している間にロケット弾が二発、喜舎場宅には見舞われます。永珣が家に戻ると家屋や壁などは破壊されていましたが、霊妙不可思議にも豚舎に保管した資料はかすり傷一つなく完全に保管されていました。

資料と再会した永珣は、この奇跡こそは偶然ではなくひとえに神仏加護の賜であると大いに神仏に感謝の誠をささげ、感激のあまり感謝の言葉を見失い、「噫（ああ）」とただ男泣きに泣き伏しました。

また、喜舎場永珣が亡くなった後、資料の保管を引き継いだのはご子息の永浩氏（故人）でした。彼はその資料の保管場所について、生前、石垣市への寄贈を願い「資料はそれを産んだ地域にあってこそ、活(い)きてくる。それは、地域の人々に刺激を与え、活力を引き出すものだからである」と語っていました。

喜舎場永珣資料大分類

【１】文書史料（232 点）

①規模帳、②公事帳、③例帳及び諸帳、④往復文書、⑤年来記・由来記・日記、⑥家譜、⑦沖縄県・八重山島役所等関係文書、⑧芸能・文学・案文等、⑨マイクロ写真紙焼本

【２】証書・辞令書等（167 点）

喜舎場永珣宛証書・辞令書等と同氏以外の人物宛の文書など。

【３】調査ノート（234 点）

喜舎場永珣が 1900 年代から 1970 年代にわたって行った調査を記したノートとメモ類。

【４】写真資料（447 点）

喜舎場永珣の沖縄タイムス賞受賞式・祝賀会をはじめ、八重山の芸能、街並みの風景、人物写真などの貴重な写真。

【５】 音声資料（37 点）

①レコード（八重山民謡、沖縄民謡、その他）。

②録音テープ（喜舎場永珣の御礼の言葉、『八重山民謡誌』出版祝賀会、その他）。

【６】図書資料（1091 点）

①一般書籍、②逐次刊行物、③抜き刷り、パンフレット等、④家譜資料。

ただし、喜舎場永珣死去後に収集された資料については本調査報告書の目的・性質などを考えて目録から外した。

【７】新聞資料（109 点）

『海南時報』、『八重山新聞』、『南西新報』、『自由民報』、『八重山タイムス』、『南琉タイムス』、『南琉日日新聞』、『八重山朝日新聞』など、1917（大正６）年から 1972（昭和 47）年までの、石垣島で発行された新聞。

【８】スクラップブック（56 点）

喜舎場永珣自身の新聞掲載論文のほか、宮良當壯・須藤利一・河村只雄などの文章のスクラップ資料や柳田國男・本田安次などの書簡のほか、碑文原稿やガリ版刷資料など。

【９】その他歴史資料（11 点）

喜舎場家文書目録・琉球切手ストックブック・宮良殿内平面図・沖縄地方遺跡分布図・沖縄読史地図（明治初年の那覇）・嘉善姓一門系図（未完）ほか。

②　各資料の紹介

【１】文書資料について

喜舎場永珣資料の内、文書史料とは、古文書類を中心とする資料群（一部、自身による書写資料も含む）のことで、232 点あります。これらの資料には、琉球王府時代に八重山島蔵元で作成・保管された文書や明治期の沖縄県及び八重山島役所等で作成された公的文書と関連文書、その他に個人所有であった私的文書などがあります。とくに八重山島蔵元で作成・保管された文書は、永珣の歴史研究の中で最も根幹をなし、加えて現在でも八重山の歴史研究をする時には必要不可欠な基礎的な資料とされています。

去る太平洋戦争では沖縄県の沖縄本島及びその周辺の島々では、地上戦が行われたことにより、その戦災で多くの歴史資料などが焼失・散逸してしまったとされています。永珣も収集した資料の保管にはなみなみならぬ苦労がありました。太平洋戦争の際には、石垣島名蔵白水に避難する前に家の裏の豚舎へ資料を隠し無事を祈りながら避難地へ向い、資料は戦渦を免れ、消失の危機を脱することができました。

永珣が大切に守り抜いたこれらの資料の価値はとても高く、1500 年以降より琉球王国に先島（宮古・八重山）がその支配体制に徐々に組み込まれて以降の構図を描き出すことができる資料として、これまでに数多くの研究書・論文等で引用されてきました。これらの古文献より語られる世界は、ときに現代に生きる私たちに往時の八重山社会の概観を再現して見せてくれます。また、これまでの歴史研究で見落とされてきたことについても、いつでも大いなる示唆を与えてくれます。これらの古文書資料の１部がジョージ・H・カーにより戦後、マイクロ写真紙焼本（以下、「マイクロ本」と略記）として複写され、多くの研究者が活用してきました。

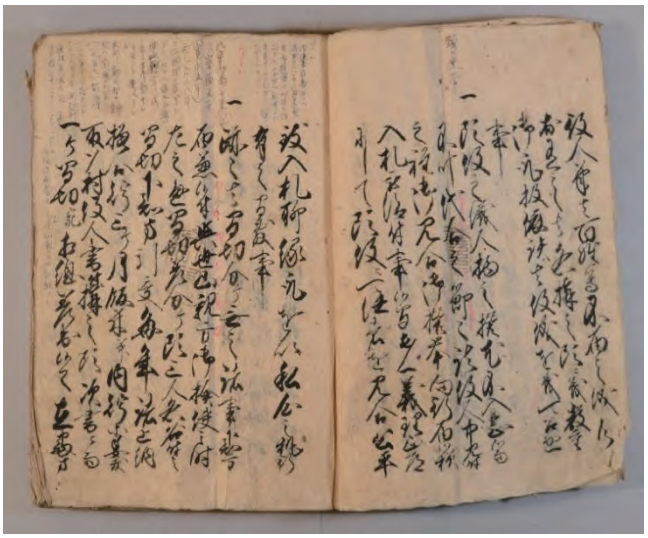
寄贈を受け入れた際、資料はその多くが１つの文書ごとに市販の黒表紙で装丁されていました。なかには丁数の少ない文書数冊をまとめて１綴とした後に、黒表紙で装丁したものもありました。これらの古文書等資料は９つの項目に分類されます。以下にその主なものについて紹介していきます。

（１）規模帳

「規模帳」とは、琉球王府が派遣した検使がその地の社会情勢を視察して、それをまとめ行政の基本方針として定めて、琉球王府から地方の機関へ布達した文書です。

琉球王府が検使を派遣し八重山を統治するために作成した「八重山島規模帳」には、康熙17（1678）年来島の恩納親方、康熙 49（1710）年来島の奥武親雲上、乾隆 32（1767）年来島の与世山親方、咸豊７（1857）年来島の翁長親方、同治 12（1873）年来島の富川親方等によって布達されことがわかっています。最初の恩納親方や二度目の奥武親雲上が布達したとされる「八重山島規模帳」は、その存在は確認されていませんが、他３親方の名で布達された「八重山島規模帳」は写本等が現存しており、それぞれが翻刻され各刊行本に掲載されてきました。

永珣が収集した八重山島規模帳は４冊（文書資料１・２・３・４）あり、いずれも、琉球王府時代の最後に来島した富川親方が布達した規模帳です。その内「八重山島御規模帳」（文書資料２）は、前述した「マイクロ本」として収録され早くより知られていました。

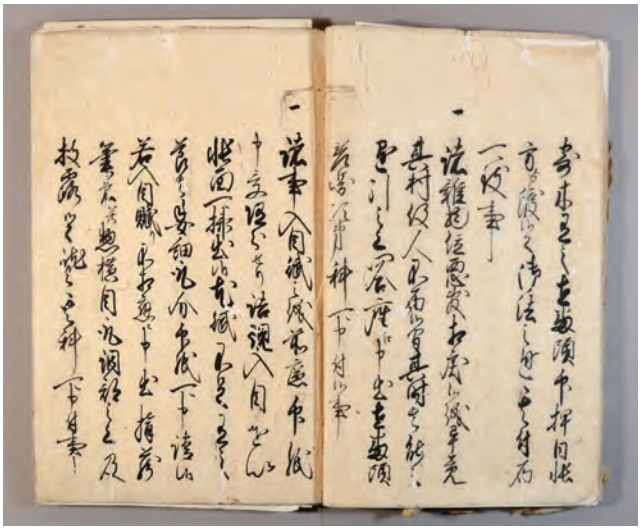


八重山嶋御規模帳　文書資料２

（２）公事帳

「公事帳」は、琉球王府が各行政機関の職掌に応じて公務案件の遂行・執務上の規定を記して布達した文書のことです。「規模帳」が統治全般にわたる全体的なことを規定したものであるのに対し、各行政機構の職掌に応じてその職務の遂行・執務上の規定として布達した文書が「公事帳」です。

琉球王府時代には宮古・八重山両先島には行政庁として蔵元がおかれており、蔵元にはそれぞれ職務内容から「座」や「方」と呼ばれる機関が設置され、統治が行われていました。八重山蔵元には廃止される以前（明治 20 年代前半）には七座（仕上世座・所遣座・勘定座・小与座・船手座・御用布座・系図座）、九方（問合方・日帳方・改方・杣山方・農務方・馬方・紙漉方・茶園方・壷瓦方）があったことが知られています。この七座九方体制がいつの時点からとられていたかは明確ではありませんが、喜舎場永珣の資料の中には、座や方を冠した公事帳もあれば、「進貢船唐船其他諸船漂流漂着公事帳」（文書資料６）や「諸村公事帳」（文書資料 35）等は、座や方のみでは当てはめることのできない職掌に関する公事帳であり貴重です。公事帳がどの程度作成されたかは明確ではありませんが、表題に付されている「〔八重山〕嶋小與座公事帳　弐拾壱冊之内」（文書資料５）、「上國公事帳　弐拾五冊之内」（文書資料８）等の表記は何らかの示唆を与えてくれると考えられます。



八重山嶋船手座公事帳　文書資料 11

（３）例帳及び諸帳

「公事帳」が法令等を規定したものであるのに対し、「例帳」は具体的な予算や数量等の詳細を規定したものです。例帳も公事帳と同様どの程度作成されたか不明です。

喜舎場永珣の資料には具体的な数量を規定した「～例帳」や「～代付帳」などの他に、それとはやや性質を異にし、職務遂行上の規定等をまとめた「公事帳」的な性質を帯びた「八重山島諸締帳」（文書資料 31・32）、「農業之次第稲穂之雌雄別」（41）、数十年間（1827 丁亥～1878 戊寅と推定されている）に起きた事件・事故の顛末を時系列的まとめた「未年怪我帳」（文書資料 39）などの諸帳が 20 点あります。

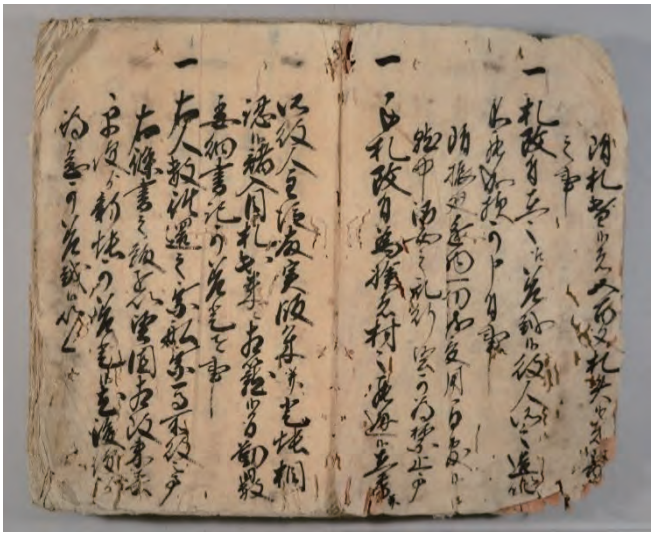
八重山嶋農務帳　文書資料 32

（４）往復文書

「往復文書」とは、琉球王府時代に琉球王府と八重山蔵元の間で案件ごとに伺いや報告が行われ、それに対して指令という形でやりとりされた文書のことです。

1771 年の明和の大津波以前の往復文書をまとめたものとして「参遣状」（文書資料 62・63・64）が広く知られています。この「参遣状」には遠藤利三郎の押印が確認できることから、八重山島役所に書記として勤務していた遠藤利三郎に関連するものと推測されます。

「御手形写」（文書資料 44～50・52）や「御問合扣書」（文書資料 53・54）も、同様の報告・指令の体裁で津波後の事項が綴られた文書です。「萬書付集」（文書資料 60）は資料名から内容を推し量りにくいですが、記載された内容から『参遣状』の別写本と推測されます。



御手形写　乾隆三十七辰年　文書資料 46

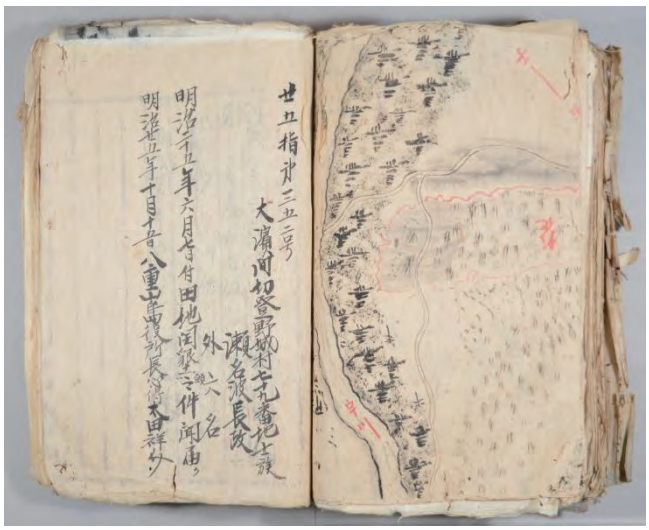
また、1771 年の八重山地方を襲った大津波の被害状況をまとめた「大波揚候次第」（文書資料 55）、「大波之時各村形行書」（文書資料 56）は琉球王府への被害を報告した文書であり、「滞在人豊見城間切真玉橋村知念筑登之逢殺害候付係合之者共問付」（文書資料 57）は、ある年に起きた事件の糾明結果を翌酉年に王府平等之側に報告した文書となっています。巻末に記されている在番等の名前から 1873 癸酉年に記録されたものだと推定できます。

（５）その他

喜舎場永珣の資料のその他の資料には、年表形式でまとめられた「八重山島年来記」（文書資料 75～81）や日記形式でまとめられた「乾隆三十九午年五月ゟ中月中日記」（文書資料 126）などの他に年来記・由来記・日記、家譜、沖縄県・八重山島役所関係文書、芸能・文学・案文等、マイクロ写真紙焼本などがあります。

1879（明治 12）年に沖縄県が発足して、翌年にはその出先機関として八重山島役所が設置されました。しかし宮古・八重山の両先島は 1897（明治 30）年までは旧来の統治体制が維持され「旧慣温存」策が敷かれていました。1896（明治 29）年には八重山島役所は八重山島庁となり役所長は島司に改称されています。このような琉球王府解体から明治政府下へと統治体制はめまぐるしく変動した中で作成された文書も残されています。この資料群は明治期の社会構造の転換期を物語る貴重な資料となります。

その他に目を引く資料には「俗謡俚諺集明治三十九年」（文書資料 154）があります。この資料は八重山郡内各小学校長よりの報告書がまとめられて綴られています。永珣が大川尋常小学校訓導時代に文部省より日本全国の民謡・俗謡・俚諺調査の依頼があり、校長から石垣村担当を命じられて調査書を報告したことを前述しましたが、この時に各地区からの調査・報告としてあがってきたものがこの資料です。



開墾願綴　明治自廿四年至廿五年　文書資料 109

エピソード　八重山島役所及び島庁の書記であった遠藤利三郎との関係

喜舎場永珣文書資料の内、沖縄県・八重山島役所関係等資料には、当時、八重山島役所及び島庁の書記をしていた遠藤利三郎が収集・作成した文書が含まれています。

永珣は山形県出身であった遠藤と親しく交流していたようで、著書の中で「私などの結婚式には、身分は下級の士族出身であったが、父が沖縄の医生講習所からさらに選抜されて長崎の蘭方医学校に留学し、そこから帰島の途中、一時、沖縄の県病院で医者をしている時に結核でたおれ、早死したこともあって、やっとの事で師範を出ることが出来た位いであった。そこで結婚式には島庁の書記をしておられた私の八重山研究の一恩人であられる遠藤利三郎から紋付袴を借用して私は第二の人生の式を行なった位いであったから、それこそ質素そのものであった」(『八重山民俗誌』1977 年　沖縄タイムス社）と記しています。これらの沖縄県・八重山島役所関係文書は、遠藤利三郎が収集したものを何らかの理由により最終的に永珣が譲り受けたものだと思われます。

【２】証書・辞令書について

喜舎場永珣資料の内、証書・辞令書に関する資料には、糊付けされたものやクリップで留められた付属資料を含めて 167 点あります。その内の２点は永珣以外のもので、祖母マイツカ子宛の下賜状と妻敏宛の辞令の各１点が含まれています。永珣宛の資料 165 点は、大きく、就学期間における修了証書や卒業証書、教職期間の異動辞令・給与辞令及び資格取得証、教職を退職後の行政機関等からの辞令や感謝状等になりますが、その他に公職以外の私的な活動に対する辞令や感謝状もいくつか含まれています。

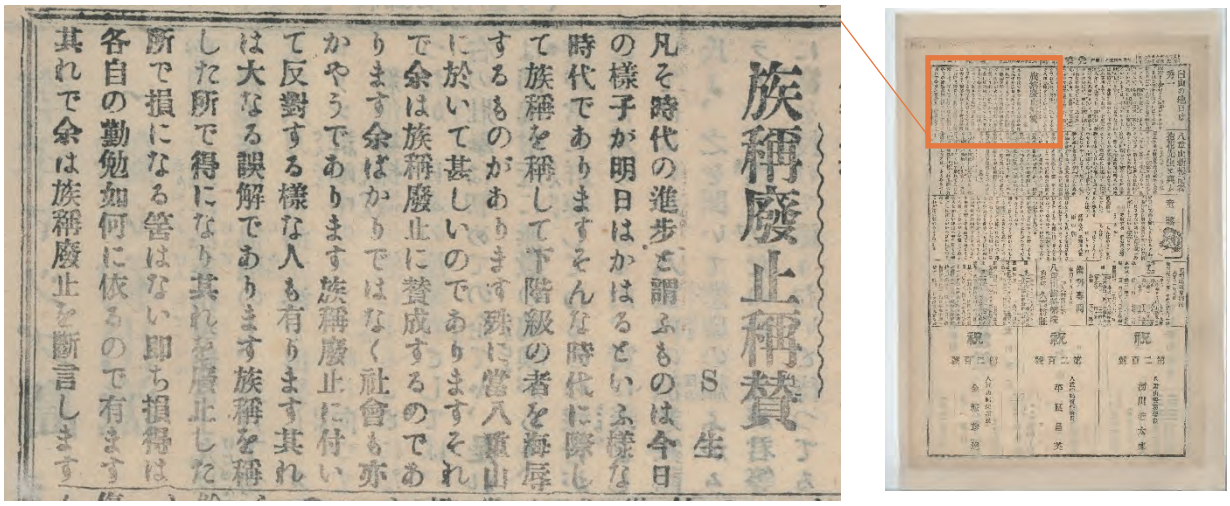
これらの辞令書等は基本的に、発令者・発令内容・発令年月日・受領者名のみが記載されたきわめて限られた内容となっています。

これらの辞令書には永珣の生きた時代、彼が生まれたのは 1885（明治 18）年で、その頃は、旧来の社会体制が色濃く残る時代で、その後、旧慣温存策の撤廃、大正から昭和にかけての社会情勢の変化、太平洋戦争の開戦から終戦へいたる激動の時代、さらにアメリカ統治下の時代を経て 1972（昭和 47）年の日本本土への復帰と流れる時代が反映されています。その約 70 年間に彼が受けたこれらの辞令書等の資料をとおして、当時の社会背景の一端を窺い知ることができます。その主なものを次に紹介します。

証書・辞令書資料には、永珣の誕生日に関する記述があるものが 11 点あり、内８点が就学期間中、残りの３点は教職在任中のものです。生年月日が明治 18 年７月生（証書・辞令書資料１）と明治 18 年６月生（証書・辞令書等資料３・５・６・７・８・９）とあり、異なる月の記載がみられます。

また、宛名の一部に「沖縄県士族」と族称が記載されている資料が 12 点あります。族称は国民を華族・士族・平民と分けた身分上の呼称で明治政府により定められたものでした。沖縄でもいわゆる旧慣温存策が 1903（明治 36）年まで継続されており、一般県民は士族と平民の二つに分けられていました。族称について、1923（大正 12）の『先島新聞』６月５日号に「族称廃止称賛」と題した投稿が掲載されています。結局、族称は 1947（昭和 22）年に施行された日本国憲法によって廃止されました。

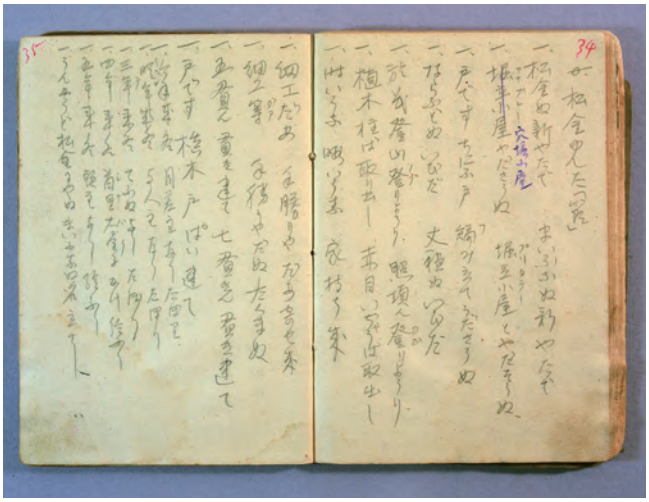
その他、教職期における異動・給与辞令の発令者名は殆ど沖縄県と記されていますが、1922 年の証書・辞令書（資料 79）を初出として、発令者名が八重山島司や八重山島庁、八重山支庁と記されるものが散見され、「文化部事務」の辞令（証書・辞令等資料 144・145）や「文化財専門審議会専門委員を命する」の辞令（証書・辞令等資料 157・158）などがあります。


族稱廢止稱賛

凡そ時代の進歩と謂ふものは今日の様子が明日はかはるといふ様な時代でありますそんな時代に際して族稱を稱して下階級の者を侮辱するものがあります殊に當八重山に於いて甚しいのでありますそれで余は族稱廢止に賛成するのであります余ばかりではなく社會も亦かやうであります族稱廢止に付いて反對する様な人も有ります其れは大なる誤解であります族稱を稱した所で得になり其れを廢止した所で損になる筈はない即ち損得は各自の勤勉如何に依るので有ます其れで余は族稱廢止を斷言します

『先島新聞』、1923（大正 12）年６月５日号の記事　新聞資料より

【３】調査ノートついて



もじほ草　明治四十年　調査ノート資料３

永珣が教員時代をしていた頃には録音機や文書を作成する機材というものはまだありませんでした。それらが普及するのは後になってからです。永珣はそのため口承（こうしょう）の歌謡などの調査では、すべて自分の耳で聞き、自らの手でそれをノートに記録し続けました。

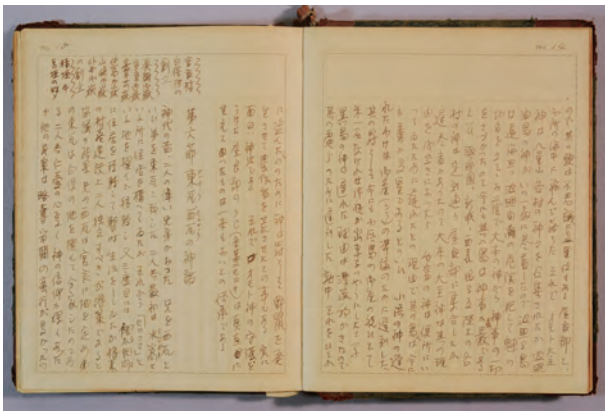
喜舎場永珣資料の内、永珣が自ら記したノート類を「調査ノート」と呼び、現在、234 冊あります。その中には、ご子息の永浩氏（故人）の制作とみられるノート（11 冊）や令孫（れいそん）一隆氏が制作したと考えられる原稿類（７冊）など、永珣以外の人によるものも含まれています。この「調査ノート」は多様な内容で、かつそれぞれが重要な価値を有し、八重山の歴史・民俗・文学などを考える上で不可欠の重要な資料群です。これからその正確な整理およびその利活用を大前提とした翻刻と出版、当然、電子情報として広く公開されることを多くの方々が切に願い待ち望んでいます。

「調査ノート」は、ほとんど大学ノートを使用しています。その他に市販の会計簿の類（「当座預金台帳」や「元帳」、「販売品買取帳」、「貸付金台帳」や、官庁の罫紙、手製のメモ帳などを使用して、それを綴り「ノート」としたもの、和紙一枚の「ノート」などもあり多様です。

また、「ノート」の特徴の一つに、ほとんどに「〇〇〇」と表題し、制作年代を推定させる年月日と永珣が使用した雅号（がごう）（ペンネーム）が記されていることがあります。

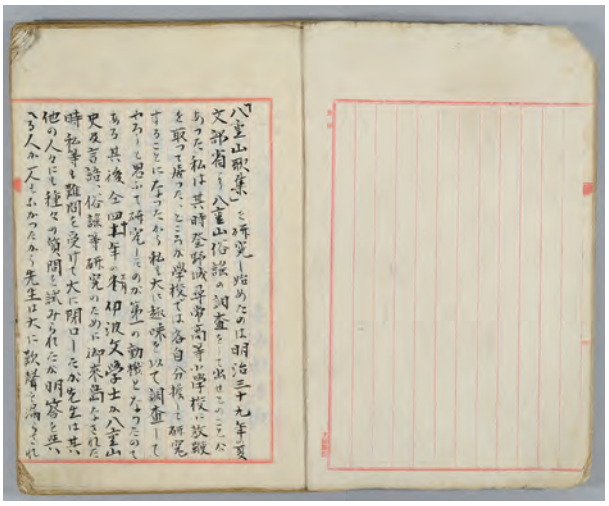
まず、表題をみると「もぢほ草・もじお草・もじほ艸・もじほ草・藻塩草」（諸々の事柄（ことがら）を書き集めるの意。）という和語の表題がみられる資料（調査ノート資料 36・180・155・3・66・１・213）があります。この名称は永珣が早い時期から使用し、後年まで使っていたことから永珣のこの語に対する愛着を現しているように感じます。

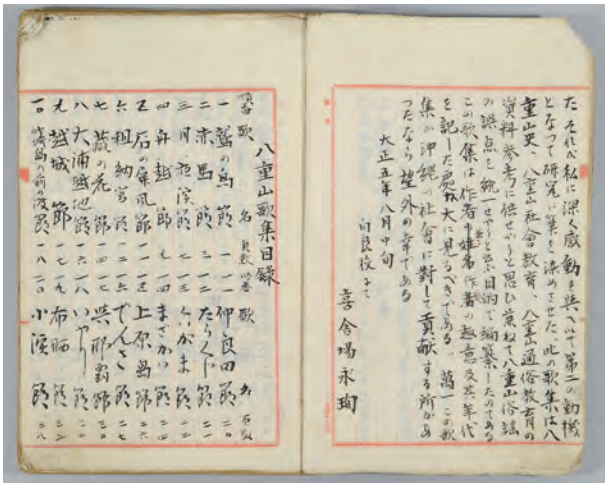
また、郷土文化の豊かさへの讃美の気持ちを表したと感じられる表題に「土の薫り」（調査ノート資料 75・86）、「島の薫り」（調査ノート資料 73）・「郷土の薫り」（調査ノート資料 77）などがあり、これと並んで郷土研究への意識と姿勢を表現したと感じられる表題に「土を掘る」（調査ノート資料 106・56・72）・「土の親しみ」（55）など「土」を用いたものもあります。珍しいものには伊波普猷の謦咳に接して得たとされる雅号「甘泉」に繋がる「甘き泉へ」（調査ノート資料 62）、伊波のオモロ研究などから示唆を得たと想定される「あけもどろの花」（調査ノート資料 31・32・170）などがあります。これらの「調査ノート」の内容は民俗に関するものが中心となっており、「河石集」（調査ノート資料 33）は、初期の雅号をそのまま表題とし、教師時代の学校資料集が収録されています。また、「於茂登岳」（調査ノート９）は、永珣が日記の名としても使用していました。



南島八重山史　第二号　明治四十一年（一九〇八
調査ノート資料６

それ以外には八重山研究を直接表現する「島の土俗」（調査ノート資料 85）・「ふしま村土俗」（調査ノート資料 60）・「鳩間之土俗」（調査ノート資料 167）・「大浜の土俗」（調査ノート資料 50）・「ぱてぃるまの土俗」（調査ノート資料 76）・「山の土俗」（調査ノート資料 184）・「小浜の土俗」（調査ノート資料 92）・「他金殿之土俗」（調査ノート資料 91）・「土俗研究」（調査ノート資料 28）など、地域名・場所などと「土俗」を併せて使ったもの、それと並んで「白保民俗（Ⅱ）」（調査ノート資料 131）・「どぅなんの民俗」（調査ノート資料 164）・「くんまー民俗Ⅱ」（調査ノート資料 127）や「八重山史と民俗」（調査ノート資料 125・134）など、地域名・場所などと「民俗」を併せて表題としたものがあります。「民俗」のついた「ノート」は、戦後に限られ使われており、その名称の変化は時代と共に「土俗学」から「民俗学」への呼称の転換を反映していると推測されます。





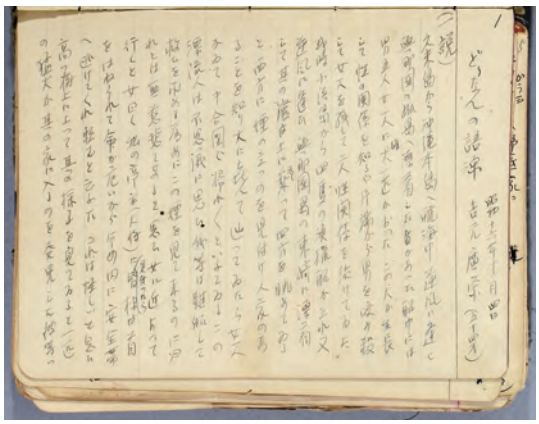
八重山歌集　（上・下とも）
調査ノート資料 10

その他に「石垣古謡」（調査ノート資料 108）・「宮良古謡」（調査ノート資料 14・15）・「大浜古謡」（調査ノート資料 151）・「竹富古謡」（調査ノート資料 135・152）・「西表租納古謡」（調査ノート資料 153）・「川平古謡（一号）」（調査ノート資料 136）・「く

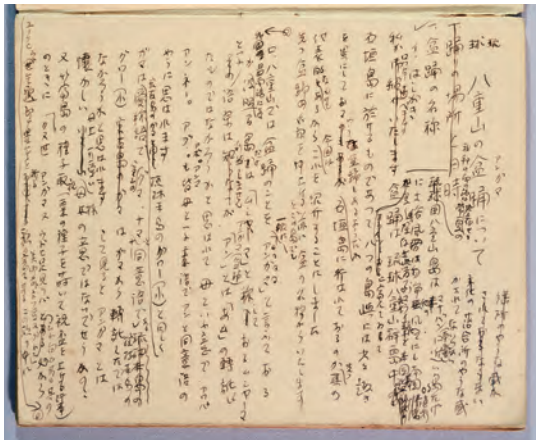
んまー古謡Ⅰ」（調査ノート資料 126）・「八重山古謡」（調査ノート資料 26・40・140～148・207）・「八重山島古謡」（調査ノート資料 123・124）など、地域名・場所などと「古謡（こよう）」を併せて名付けた調査ノート類や、同様のものに「どうなんの民謡、神謡、童謡、民俗、誦言」（調査ノート資料 109）・「西表租納　民謡、神謡、童謡、民俗、寿詞、俚諺」（調査ノート資料 182）、「小浜島　歴史、民俗、民謡、神謡、童謡、俚諺」（調査ノート資料 110）・「石垣市　民謡、童謡、民俗、俚諺、歴史其他」（調査ノート資料 115）のように地域名・場所と日本語による歌謡ジャンルを列挙（れっきょ）して内容を表したもの、「いしやなぎら　ユンタ・ジラバ・アヨー・ユングトゥ」（調査ノート資料 113）・「石垣部落　ユンタ・ジラバ・アヨー　Ⅲ号」（調査ノート資料 114）・「他金殿島　アヨー・ユンタ・ジラバ・ユングト　記集（３）」（調査ノート資料 190）・「他金殿島Ⅲ　ユンタ・ジラバ・アユウ・ユングトゥ・民俗歴史其他」（調査ノート資料 116）などのように、地域名・場所などと民俗語彙（ごい）による歌謡ジャンルを列挙して示したものや、「民謡」「～歌集」の名の付いた「八重山民謡集」（調査ノート資料 191）・「八重山歌集」（調査ノート資料 8・10・132・201）・「八重山島民謡誌」（調査ノート資料 138）・「続八重山島民謡誌」（調査ノート資料 25）などもあります。その他に永珣自身による表題はついていませんが調査ノート資料 209～212 は、その内容から「八重山民謡誌」の草稿（そうこう）の綴りと考えられ、とても重要な資料です。何れも永珣の研究を代表する八重山歌謡研究（テキストの作成と注釈および解説）の「調査ノート」群です。

このほかにも地域名などと「～研究」のついた「与那国研究」（調査ノート資料 16）・「白保研究」（調査ノート資料 17）・「波照間研究」（調査ノート資料 18）・「宮良研究」（調査ノート資料 19）・「小浜研究」（調査ノート資料 20）・「大浜研究　仲尾次政隆翁」（調査ノート資料 51）・「平得研究」（調査ノート資料 46）などがあり、これらも地域の歴史・民俗などを調査記録したものです。

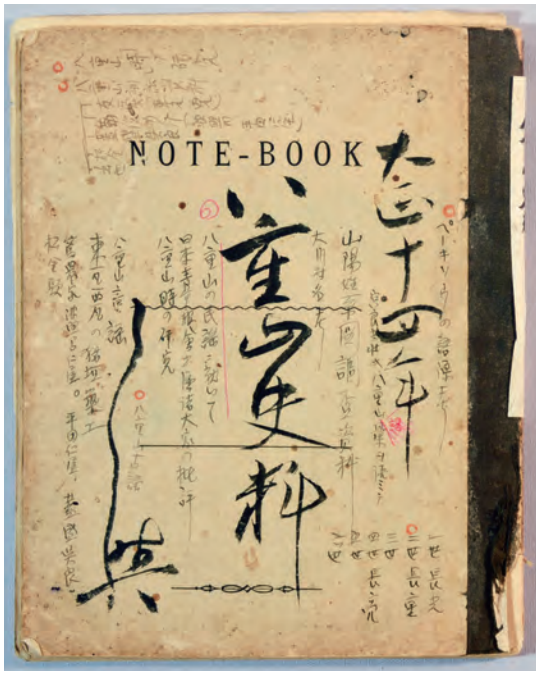
ところで「調査ノート」には、永珣の研究のもう一つの大きな領域であった八重山歴史に関する調査ノート群があります。八重山の歴史に関するものに「八重山史料」（調査ノート資料 29）・「八重山の歴史 序説」（調査ノート資料 171）・「八重山歴史草稿　第一編・第三編・第四編」（調査ノート資料 173～176）・「南島八重山史



どなんの土俗　昭和十六年十月
調査ノート資料 87

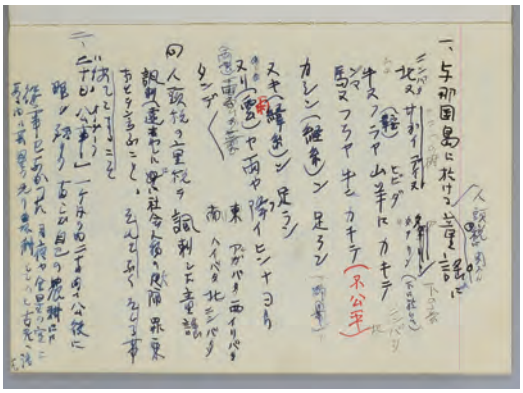


あんがまの研究　盆行事　一九三〇．五．二
調査ノート資料 47



八重山史料　大正十四年
調査ノート資料 29

第二号」（調査ノート資料６）・「八重山史と民俗　（Ⅲ）（Ⅳ）」（調査ノート資料 125・134）・「八重山史と民俗　５号」（調査ノート資料 137）・「史と民俗」（調査ノート資料 157）・「八重山五百年史」（調査ノート資料 52）・「八重山郷土史料」（調査ノート資料 202）・「南琉八重山略史」（調査ノート資料 97）・「八重山歴史ノ編集と目次」（調査ノート資料 99）・「八重山歴史の時代区分と目次」（調査ノート資料 100）などがあり「八重山歴史」或いは「八重山史」などの付く表題により、これらの「調査ノート」が八重山の歴史に関わるものであることがわかります。また、「南島資料」（調査ノート資料 203）・「南島資料Ⅲ」（調査ノート資料 129）・「史料綴Ⅱ・Ⅲ」（調査ノート資料 204・35）・「郷土史料」（調査ノート資料 206）などの、「史資料」であることを示す名称や、「八重山 古文書台帳」（調査ノート資料 118）・「古記録台帳」（調査ノート資料 119）・「古文書台帳」（調査ノート資料 120）などの古文書類の目録や、「八重山姓氏集」（調査ノート資料 188）・「姓氏集」（調査ノート資料 189）・「人頭税史料」（調査ノート資料 160）・「人頭税ニ関スル俚諺集」（調査ノート資料 156）など八重山の歴史と深い関わりのある、個別的な領域を示す表題の付いたノートもあります。



人頭税ニ関スル俚言集　一九七〇年十月
調査ノート資料 156

その他に芸能に関係する「調査ノート」や自然科学に関係する「調査ノート」もあり、「八重山ノ昆虫研究　八重山島□の名称」（調査ノート資料 193　成立年不明）や「八重山植物」（調査ノート資料 196 成立年不明）の二冊は、岩崎卓爾や瀬名波長宣などが活躍した分野でありますが、永珣が自然についても独自の調査をしていたことが伺える貴重なものです。

また、喜舎場永珣が企図しながら果たせなかった研究領域に「言語」がありました。言語については 1930（昭和５）年に宮良當壯により『八重山語彙』が刊行されており、永珣にとってこの書に対する意識は相当強かったと目されます。それを示すように「八重山古語集」（調査ノート資料 165）の冒頭に「『ア』（以下は語彙に脱しテおる語）」とあり、以下、「（イ）」「イーカー」～「イニガダニ」までの語彙が記されていることからも、そのことが推測されます。もっとも、永珣の八重山語研究は、『八重山語彙』以前にスタートしており、それは 1920（大正９）年１月１日の日付をもつ「八重山古語集」（調査ノート資料 13）の存在から窺うことが出来ます。他に言語関係の「ノート」としては東條操編・炉辺叢書『方言採集手帖』を使った 1930（昭和５）年の年紀を持つ「方言採集手帖　八重山白保の方言」（調査ノート資料 45）があり、この調査ノートには基本的に全ページに語彙の記入がなされており、「方言採集手帖」に従った白保方言の調査が一応の「完了」をみていたことが分かります。この白保方言調査に倣って、八重山全域に方言調査の手を広げる構想を持っていたようで、それは調査ノート資料 169 の全ページに、上下見開きで、横軸に調査語彙の欄、縦軸に村名欄を設定した枠線が引かれ、東條の『方言採集手帖』の調査語が八重山全域で一覧できる表を作成しようと試みていることからわかります。しかし、この「ノート」は最初の「天文」「地理」「動物」の三部の調査語彙欄の記入で終わり、調査は継続されなかったようです（縦軸の地名も最初の頁にしか記されて無く、各地方言語彙は一切記されていない）。他にも「八重山古語」「日琉古語解集」などの名を持つ「調査ノート」があり（調査ノート資料 13・122・149・177・102）、これらの「調査ノート」には戦後のものもあることから、八重山語辞典の構想は絶えず「宿願」としてあったことがわかります。しかし、完成にはいたらず、永珣にとって言語を調査し、それをまとめあげることは、鬼門のように立ちはだかっていた難題だったと感じられます。

ところで、「調査ノート」の表紙に表題と並んで記された成立に関わる年月日の記述は、「調査ノート」全体が成立した年月日を示すのか、あるいは、その着手した年月日を示すかは明らかでありません。「調

査ノート」内部の記事などに表紙の墨筆記載とは別の年月日が記された例があることより、当該「ノート」の成立が必ずしも墨筆どおりではなかったであろうと推測されます。

さらに「ノート」表紙の大部分に記された喜舎場永珣の雅号（ペンネーム）には、「川石・河石」「天与」「甘泉」をはじめ、「一雀」・「窮措太」と記載されたものがあります。喜舎場永珣が直接制作した「調査ノート」215 冊の内、55 冊には記名はありませんが、記名された残り 158 冊でみると、最も多い雅号は「甘泉」（「喜舎場甘泉」も含む）で 88 を数え、次に多いのは「天与」（「喜舎場天与」も含む）の 29、「川石・河石」が 23 と続きます。新しい「甘泉」の雅号が多く用いられていることは「調査ノート」の成立時期を反映しているとともに、永珣のこの雅号に対する愛着の度合いを表しているものと感じられます。その他に「喜舎場永珣」・「永珣」と記名されたものもみられます。

長きにわたり郷土八重山を研究してきた永珣の足跡は「調査ノート」（紀年の記されていない調査ノート資料 162・163 など 71 冊を除く）により辿ることができます。紀年の最も古いものは「明治三六年、三月下旬」の「中等漢文読本巻三」を筆写した「藻塩草」（調査ノート資料１）です。この調査ノートをスタートとした場合、1903（明治 36）年の永珣が 18 歳の時より調査ノートの制作を、写本によりはじめたことになります。1904（明治 37）年には３冊の調査ノート（資料２・３・４）を制作しておりますが、調査ノート資料３「もじほ草　民謡　童謡　子守歌　史料　八重山哥ノ序文」と調査ノート資料４「八重山俚諺集」は、後年大成することになる八重山歌謡研究及び口承文芸研究に関するもので、それらがいち早く登場していることに驚かされます。以後、逝去する一年前の 1971（昭和 46）年に至るまでの 67 年間にわたり、毎年のように複数冊の「調査ノート」を制作しました。現在、大正から戦前期昭和の７年間（1913・1915・1917・1919・1939・1942・1944 年）と戦後の４年（1949・1952・1956・1957 年）の年紀が記された「調査ノート」は確認できていませんが、内容を細かく検討していくことにより、これらの年の研究活動も明らかとなってくると考えられます。

あんとり　さけーま　かぬか土俗
調査ノート資料 166

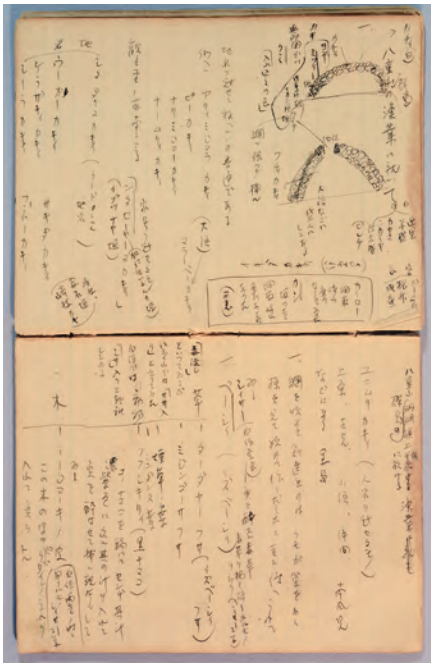
これらの「調査ノート」は、彼の刊行物の基礎資料となったことはいうまでもありません。幾つかの調査ノートをめくってみるだけでも、調査ノートには独自の価値があることは明らかです。永珣の代表的著作として『八重山島民謡誌』（1924）、『八重山民謡誌』（1967）、『八重山古謡』（上下。1970）、『八重山民俗誌』（上下。1977）、そして『八重山歴史』（1954。増補改訂版=1975）が広く知られています。執筆の際にこれらの「調査ノート」がどのように活かされたかについて明らかにすることは大変重要なことだと考えられます。一つ例を上げると、『八重山古謡』には、八重山各地の古謡が網羅されていることになっています。「同種の歌については、とくに比較対照を加え、最も正確に近いと思われるものを選定した」（同書「序文」）とあり、他の歌については捨象しています。しかし、「調査ノート」を細かくみていくとその捨象されたものにも貴重な資料と考えられるものが含まれています。調査ノートの中には西表祖納の「パナリミジュユングトゥ」（下巻 498）と採録されなかった西表船浮の「ぞんぱらま」（調査ノート資料 166「あんとり　さけーま　かぬか」に収録）がありますが、船浮の「ぞんぱらま」には『八重山古謡』には記されていない重要な語注があります。これを参考すると『八重山古謡』p500・504 の「ゾンパラマ」の訳と語注は補筆されなければならないと考えられます。

歌謡の取捨選択については、歌謡関係の調査ノートの精査が必要と考えられます。『八重山古謡』に収録されなかった多くの歌謡と、それに関する民俗・伝説などが調査ノートに眠ったままの状態にありま

す。八重山各地の歌謡伝承の歴史的事実を知るためにも、多くの八重山歌が失われてしまった現在、調査ノートに記載された全歌謡の集成により、その全体像を知ることができるでしょう。八重山の歌謡文芸を知る上で必須のこれからの重要な仕事と言えるでしょう。

また、彼の論考においても古謡と同様、調査ノートに記載されたその全てがそのまま論考に活かされたわけではありませんでした。まとめるにあたっても、取捨選択が当然なされ、採用されなかった記事にも価値を見出すことができます。例えば 1934（昭和９）年刊行の『島』に発表された「八重山における旧来の漁業」（『八重山民俗誌』上巻に収録）の元となった資料は調査ノート資料 37 にある「八重山群島の漁業について」でした。発表されたものより調査ノートには図と共に、より多くの情報が記されているようです。

さらにあげると、八重山近代史の史料としてとても貴重だと考えられる調査ノート資料 30 の「童謡民謡研究」があります。この調査ノートには、八重山で初めて催され、八重山に伝来してきた物品を展示してその文化の紹介を企図した展覧会のことがまとめられています。ノートの冒頭には 1923（大正 12）年８月７日から開催された「展覧会」の準備段階からの記録が細々と記されています。また、この展覧会は新聞でも報道されました。それにも拘らず、その理由は分かりませんが、後に永珣が記した『八重山歴史』などの本文や年表では、そのことについて取り扱われることはありませんでした。何れにしても調査ノートには、それに関わった人や展示品などが具体的に記されており、八重山のみならず、沖縄における展覧会などの文化事業の歴史を知るうえで貴重な資料と考えられます。さらにもう一つ紹介すると「郷土の調べ」（調査ノート資料 27）には 1939（昭和 14）年７月 19 日に、八重山語の調査のために来島した「ハワイ大学のデンゼル・カール教授と大浜信烈翁」を訪ねる記事があります。これまでほとんど知られていなかった外国人研究者による八重山語研究の証拠となるもので、大変興味深い資料です。



民間傳承　1927. 6. 28
調査ノート資料 37

このように「調査ノート」は活字化されていない記事はもちろんのこと、論文などの形ですでに活字となっているものも含め、「調査ノート」との対照により、何が永珣の調査によって記録に留められたのかを明らかにし、その活用を目指すことが期待されます。また、彼の調査は、各村・各島の名の付された調査ノートが存在していることから、八重山全域に及んでいることがわかります。八重山各地・各島を研究する上でも「調査ノート」は貴重な記録となっているはずです。

郷土之調べ　1925. 3. 4
調査ノート資料 270

また、調査ノートに随所にみられる日付から八重山を訪れた研究者の来訪とその時期や目的を知ることができ、私たちは、これにより外部の研究者にとって八重山がどのような文化的・自然的価値を有する地として評価されていたか、を知ることができ、これらの年月日を拾い上げ、繋ぎ合せていくことにより草創期の喜舎場永珣を中心とした八重山の研究活動の歴史が明らかになってくことが期待されます。

イントロダクション　永珣と雅号

雅号とは文筆家・画家・学者などが、本名以外に付ける風雅な名のこととされています。日本にはその風習が中国から伝わり、俳人であれば俳号（俳名）、吟詠家であれば吟号などと称し、本来、自らが自由に名乗るものですが、今日の習い事などでは、師匠につけて貰う、師匠から一字を貰う、技術段階（段位等）によって決まった字を用いるなどといった制約があることもあり、段階によって雅号を改めることも多いようです。森鴎外の「鴎外」などは有名なようですが、永珣も時と共に成長して雅号を使用しました。使用した主な雅号には次が知られています。

天与＝「てんよ」と読み「郷土研究は天の与えた使命である」という自覚をあらわしたものといわれています。

川石＝「せんせき」と読み「圭角の強い性格反省から、川底の石の円いことを理想として表現した」といわれています。

甘泉＝「かんせん」と読み、「伊波普猷の教示「汝の立つところを深く掘れ、甘き泉あり」というドイツの哲学者ニーチェ(1844～1900 年)の言葉に由来する」といわれています。

※牧野清「喜舎場永珣の生い立ちとその生涯」『喜舎場永珣生誕百年記念誌　甘きいずみ』1987（昭和 62）年を参考とし、一部に加筆、修整しました。

【４】写真資料について

喜舎場永珣資料の内、写真資料は 447 点（封筒を含め）あります。写真の種類には、ガラス乾板、ネガフィルム、カラー写真、モノクロ写真、絵葉書などがあり、その他の資料類の量からすると少ないのではという感は否めません。

写真資料の内容は永珣本人や人物・人物集合、風景、建物や墓、行事、舞踊、八重山民謡出版祝賀会等があります。その主なものを次に紹介します。

写真資料の中で最も古いのは、ガラス乾板の「父の寫眞」（写真資料 313）と墨書され灰色封筒に入った乾板です。写真には立位で羽織袴、左手は台上に、右手には傘と帽子を持ち下駄を履いた男性が写っています。死去した 1893（明治 25）年以前のものと考えられ、県立病院在職中に沖縄本島あるいは在学中長崎で撮影されたものではと推定されています。江戸時代末期 1863（文久３）年生まれの人物の写真として貴重です。

写真資料 254 は母喜舎場ヲナリムイ（昭和 10 年１月撮影当歳 76 才）と記され台紙に貼られたものです。藤椅子らしきものに腰掛けウチナーカンプーの女性が写り、髪にはジーファーをさしています。台紙にはハナキ写真館の押印があります。1928（昭和３）年頃から字大川で開業していたハナキ写真館で撮影した正月の記念写真だと思えます。

学芸会　女生徒合唱　1926. 7. 1　写真資料 136

子ども達　詳細不明　写真資料 134

永珣自身の写真は30代から晩年のものが残り、青年教師の頃のものには子ども達の写真が多くあります。

ところで登野城にあった喜舎場家は、北側に門があり、瓦葺きの平屋造りでした（写真資料 79）。永珣の研究を支えた書斎（しょさい）は一番座で、多くの書籍や資料に囲まれた永珣（写真資料 126）や屋敷内での訪問者との写真が数多くあります。写真資料94は門を入って右手にあったとされる豚小屋の写真です。戦時中に彼の資料を守り抜いた場所を撮影した写真で、エピソードが残りとても興味を惹（ひ）かれる一枚です。

1932（昭和７）年教職を辞して研究の道に入った永珣ですが、喜舎場宅へは多くの研究者が訪れました。写真資料142は1958（昭和33）年早稲田大学講師本田安次が古典舞踊研究のため来島し、その時、永珣（74才）を撮影したものです。

写真資料には交流が深かった岩崎卓爾の写真や岩崎卓爾が撮影したであろう「糸数原主人」と押印された八重山一村当時の蔵元役人の写真（写真資料177）の他、「1922（大正11）年８月、折口信夫が民俗調査研究のため来島し、諸所方々方同行して案内した際に、折口が撮影した「登野城の爺と姥」（写真資料169）の写真などがあり、写真記録の少ない時代に撮影したものとして貴重です。

また、写真資料には舞踊に関する資料が多く残されています。

1940（昭和15）年５月に日本劇場（日劇）で、八重山芸能の公演が開催されました。公演のために女性ダンサー２人が来島して、八重山舞踊を習得した後に東京でダンシングチームに教え公演が開催されました。そのダンサーと思える２人の女性（写真資料73、74）やその時指導に関係した星潤の親鷲と子鷲を３人で踊る「鷲ぬ鳥節」（写真資料23）は、日本劇場公演に関係するものでとても貴重です。

その他、舞踊に関する写真には、永珣の著書『八重山民俗誌』（1977）に掲載されている「勤王流二十二手」が、児玉清子さんの所作で 27 点の写真として全て残されています（写真資料315～341）。

瓦葺民家（喜舎場家宅）
1940（昭和15）年　写真資料79

喜舎場永珣と書斎　年代不詳　写真資料126

屋敷内家畜小屋　1940（昭和15）年
写真資料94

喜舎場永珣（74歳）1958（昭和33）年７月
写真資料142

1960（昭和35）年11月、ハワイ大学教授ジョージ・H・カーが来島して、永珣所蔵の古文書の一部を撮影しました。うず高く積まれた古文書類を前に、カー博士らとともに永珣が写真に納まっています（写真資料 221）。

また、1965（昭和40）年７月には、C・アウエハントが波照間島民俗研究のため妻静子とともに来島しました。調査に当たったアウエハント静子と永珣との写真が現存しています。

その他に、伊波南哲、伊波普猷、宮良長包、大浜津呂らとの交流もあり、今後、写真資料の調査分析により多くのことが浮き彫りに成ることが期待されます。

八重山村役人　1910 年前後　写真資料 177

登野城の爺と婆　1923（大正 13）年写真資料 169

女性　1940 年　写真資料 73

舞踊「鷲ぬ鳥節」星潤と女性　1940 年　写真資料 23

女性　1940 年　写真資料 28

起怒

児玉清子　舞踊　勤王流二十二手（左：写真資料 315、中：写真資料 332、右：写真資料 340）

その他、永珣は、1965（昭和 40）年７月、宗教法人生長の家理事長より委嘱を受け、八重山誌友相愛会会長に就任しました。生長の家「地上天国実現運動」での活動に関りました。その写真もみられます。

「日本民俗舞踊ユンタ上演記念」として日本郷土芸能研究会より贈呈された１冊のアルバムに収められた写真類があります。この写真は 1964（昭和 39）年８月、宝塚歌劇月組公演として琉球八重山編「ユンタ」が上演されたときのものです。永珣もこれに関係、協力していたと考えられ、「東座（アガローザ）」「くば笠踊」「まみどうま」などの上演された写真があります。

その他にスクラップブック（喜資 0004）の中にも写真が入っています。1928（昭和３）年４月、日本青年会館主催、「第３回郷土民謡舞踊大会」で八重山民謡舞踊が上演され、その時、八重山郡石垣町の皆さんが日本青年会館で踊った「かせかけ」「古見浦節」「鷲ぬ鳥節」、純民謡（ユンタ、ジラバ）、「布晒節」など 15 点が洋紙に貼付され残されています。その時の集合記念写真には永珣が写っており、とても貴重です。

「汝の立つ所を深く掘れ、甘き泉あり」と、郷土を学ぶことの大切さを説いた永珣。自宅にてくつろぐ永珣や様々な場面で写し出された永珣の実相が、写真から浮かびあがるのではないでしょうか。また、永珣の人物像や往時、あるいは内外の研究者との交流に思いをはせることもできるのではないでしょうか。

くば笠踊　写真資料別冊

まみどうま　写真資料別冊

月ぬ美しや　写真資料別冊

黒島口説　写真資料別冊

日本民俗舞踊「ユンタ」上映記念アルバム　1964 年宝塚歌劇８月月組公演の記録写真　スクラップ資料４

【５】音声資料について

「喜舎場永珣資料」の内、音声資料には、レコード〔ＳＰレコード（24 枚）とシングルレコード（ドーナツ盤）（２枚）〕とテープ〔オープンリール・テープ（10 巻）〕とカセットカセットテープ（１巻）があります。

これらの音声資料は、戦禍を潜（くぐ）り抜け、高温多湿という悪条件の中で永珣や家族によって大切に保存された後、寄贈されました。

ＳＰレコードは 1934（昭和９）年、日本コロンビア蓄音機（ちくおんき）株式会社から寄贈されたもの（23 枚）とタイヘイレコード（１枚）です。ドーナツ盤は 1960 年代に制作されたもので、寄贈されたものなのか或いは購入したものかは不明です。ＳＰレコードの内容は八重山民謡（４枚・８曲）、筑前琵琶（ちくぜんびわ）（２枚・１曲）、琉球民謡安冨祖流（５枚・７曲）、琉球民謡野村流（６枚【両面３枚・片面３枚】・９曲）、琉球民謡（片面３枚・５曲）、古典音楽（１枚・２曲）、宮古民謡（２枚・４曲）、外国民謡（４枚・７曲）です。八重山民謡の１枚はひびが入っていますが、それ以外のすべての状態は良いです。15 枚には日本コロムビア蓄音機株式会社贈呈シールが貼りつけられています。また、レーベルや解説カードに「報国」「ＢＡＤＦＥ」の黄印や朱印が捺（お）され、内袋 19 枚、解説カード 15 枚（１枚破損）が付いています。

ドーナツ盤はマルテルレコード（１枚・２曲）、マルフクレコード（１枚・２曲）で、両レコードには袋や解説書があり、音源は一部スレなどもありますが、状態はおおむね良好です。

八重山民謡には大濱津呂（1891～1970）、崎山用能（1900～1945）、仲本政子（1885～？）の「彌勒節」「小濱節」「古見の浦節」「仲筋のヌベマ節」「ションカネー節」「ションカネー（改作）」「亀久畑節」、それに喜舎場自身の唄に大濱が三線伴奏（ばんそう）した「下原節」となっています。

琉球古典音楽安冨祖流には金武良仁（1873～1936）による「諸鈍節」、「仲村渠節」、「こてい節」、「仲間節」、古堅盛保（1882～1961）の「作田節」、「赤田風節」、「邊野喜節」となっています。琉球古典音楽野村流は伊差川世瑞（1872～1937）、又吉栄義（1882～1951）による「宇地泊節」、「湊くり節」、「平敷節」、「揚高禰久節」、「世榮節」、「垣花節」、「首里節」、「ぢやんな節」、「あかつき節」と仲泊兼蒲（1888～1945）、国吉つる（不明）による「干瀬節」、「子持節」、辰巳初子（不明）、新崎まさ子（不明）による「赤田花風節」、「夜雨節」、「浮島節」、「麥ちゆる節」、「いもの葉節」、宮古民謡は宮古西城小学校校長友利明令（1892～1971）の唄、ピアノ伴奏に天久秀人（不明）、囃子に池村恵信（1895～1974）で「お正月のあやぐ」、「トーガニあやぐ」、「豊年のうた」、「狩俣のイサメガ」となっています。特異なのは鹿倉旭霊（不明）の筑前琵琶による「琉球の楠公　護佐丸」となっています。ドーナツ盤のマルテルレコード

古見の浦節　音資料 001-2

八重山民謡　ションカネー節
音資料 001-3

八重山民謡　下原節　音資料 001-4

琉球民謡　諸鈍節　音資料 001-7

には唄嘉味田みつ子「恐るさ物や見い欲さ物」、唄玉井良子、稲峯八重子「出船の唄」となっています。マルフクレコード「ベールベール」には唄兼村憲孝、当山達子、「懐かしき故郷」唄当山達子となっています。両レコードとも 1960 年代に制作されたものです。作詞作曲者の照屋林助（1929～2005）は喜舎場と交流があり『八重山民謡誌』の愛読者でもありました。

次にテープ類をみますとオープンリール・テープ（10 巻、カセットテープ１本）は、オープンリールの保存状態は、良好なものは６巻、４巻は不良です。カセットテープはすべて良好です。オープンリール・テープはケース無しが１巻で、他はケースに録音内容が記されています。一部表記と内容が違うものがありますが、保存状態が良好なテープは全てデジタル録音されています。

永珣は生涯の研究テーマとしたのは多岐にわたりますが、その中でも民謡や古謡は生涯をとおして研究テーマとしていました。永珣は村々島々を訪れ古老から聞き取った歌詞を丹念（たんねん）にノートに記録しています。喜舎場が調査をしていた時期は、八重山近代化の流れの中で多くの歌が消滅（しょうめつ）していった頃といわれています。永珣は歌が消滅していくことに危機感を抱いていました。1934 年日本コロムビア蓄音機会社から民謡吹き込みの計画が持ち込まれたときすぐに了承しました。「八重山芸術の保存普及を痛感（つうかん）し亡び行く舞踊をカメラに納め民謡を正しく吹き込ませて保存したい」（「喜舎場ノート」）との思いからであったにちがいないと感じます。1965 年、東京八重山郷友会有志からテープレコーダーが贈られました。当時 81 歳という高齢の喜舎場は録音機を前に、時代の制約とはいえ、歌を残せるという喜びと、消滅した歌への思いを馳（は）せ複雑な思いも去来したのではないだろうかと感じます。

これらの音声資料は、戦禍を潜り抜け高温多湿という悪条件の中で永珣や家族によって大切に保存されてきたものです。

琉球民謡　首里節（左：レコード　右：歌詞カード）
音資料 1-14

古典音楽　干瀬節
音資料 001-18

宮古民謡　豊年のうた
歌詞カード音資料 1-20

謹呈　喜舎場永珣先生　1976. 4. 6
安室孫盛　喜舎場宅にて　音資料 2-3

謹白　昭和九年十月　コロンビア会社で吹き込んだ
八重山民謡十八曲（大浜津呂　崎山用能、仲本マサコ）
音資料 2-2

【６】図書資料について

喜舎場永珣資料の内、図書資料は 1,645 点を数えます。その中にはご子息の永浩氏（故人）やご令孫一隆氏の所蔵と思われるものも含まれます。永珣が没後のものを除き、永珣が利用したであろう図書をみると、「一般図書」（697 点）、「逐次刊行物」（241 点）、「抜き刷り・パンフレット等」（149 点）、「家譜資料」（４点）などとなっています。

これらの図書資料は、単なる印刷物としてだけではなく、記された所蔵年や書き込みなどより、所蔵の経緯や、永珣の人的な交流、研究の足跡（経過）、考えや心情などを伺うことができます。そのため、今後、永珣研究をする上で欠くことのできない貴重な資料です。次に主なものを紹介していきます。

「一般書籍」は、琉球関係資料が中心となっています。とくに歴史、民俗、言語、芸能、文学などの分野に関するもので占められています。

「逐次刊行物」には、『沖縄文化』、『沖縄歴史研究』、『琉大史学』や宮良當壮編の『月刊琉球文学』などがあり号数毎にまとまっています。

「抜き刷り・パンフレット等」には、歴史、民俗、言語、芸能、文学などの分野に関するもので一般書籍と同様ですが、自然科学の分野に関するものもみられる点で他と異なります。

まず、図書資料には、価値が高いと考えられる点が幾つかあります。その一つは、書籍そのものに価値があるものです。1885（明治 18）年に発行された蔡温の著書『林政八書　全』や笹森儀助『南嶋探験』の初版本、比嘉徳『八重山郡史』（1910 年）や大濱用恭の『八重山の研究』などは、今では入手が困難でとても貴重なものです。

もう一つは、図書資料への書き込みより、永珣の元を訪れた人や交友関係、どのような点に着目していたかを知ることができる点です。

宮良當壮著の『八重山語彙』の裏表紙の見返しには「うるぢんぬ鶯（うぐいす）ぬ声ゆしきぃたなあ一／昭和六年三月／1931. 3. 6 地久節の日到着す／川石」と記述されています。教え子である宮良當壮の出版が特別にうれしかったと感じられ、他にはあまり類がみられません。

また、島外で購入したであろうと推測される本には、「家の光大会出席の時求む」や「昭和 13 年 11 月 21 日繭価協定会出席の時求ム」と記入されています。

本に記載された「収蔵年月日」を永珣の年譜と重ね合わせてみていくと、1921（大正 10）年前後には柳田國男、鎌倉芳太郎、田辺尚雄、折口信夫らの多くの著名人が永珣の元を訪れていますが、一般書籍の所蔵年の 1920・1921 年には折口信夫から『萬葉集　下巻』、柳田から『南海小記』、田辺尚雄から『第一音樂紀行』が年譜と重なるように献本されていることを伺うことができます。

南嶋探験　図書資料 246

沖縄教育　第百四十七號　図書資料 91

【７】新聞資料について

喜舎場永珣資料の中で異彩を放つのが新聞資料です。一部を除き、1906（明治 39）年から 1972（昭和 47）年までの 66 年間にわたり、八重山で発刊された新聞がほぼ収集されています。新聞を個人で何年も収集し保管しているのは全国的にも例がないとされています。永珣は「新聞には時代の情報が記され、積もれば八重山の歴史となると家族に語っていた」との永珣の新聞収集観を知る逸話があります。八重山は、台風の影響もあり、高温多湿で、虫害の影響や戦禍などの悪条件の中で保存されてきたことに驚嘆します。

新聞資料（機関誌を含む）は 19 点あり、実に 19,984 枚にものぼります。当館では沖縄振興特別推進交付金事業により 2013 年度から修復を進め、『沖縄教育』、『先嶋新聞』、『八重山新報』、『兒童の産業』、『先嶋朝日新聞』、『八重山民報』、『石垣産業組合報』、『産業組合協會報』、『旬報』、『民友』、『八重山こども新聞』、『海南時報』（18 綴、3702 枚）、『八重山タイムス』（16 綴、3323 枚）、『南西新報』（７綴、1049 枚）、『自由民報』（７綴、1098 枚）、『南琉タイムス』（３綴、532 枚）、『南琉日日新聞』（２綴、465 枚）、『八重山朝日新聞』（６綴、1582 枚）、『八重山新聞』のすべての修復を終えました。

また、新聞資料には地元以外の２紙が含まれています。その１紙が『沖縄教育』、もう１紙が、沖縄県教育会が発刊した機関紙です。沖縄私立教育会として 1886（明治 19）年に発足して、同年より『沖縄私立教育会雑誌』が発刊されました。後に組織の変遷にともない名称、機関誌名が改称されています。

1906（明治 39）年の第１号は発行所沖縄県教育会、発行兼編集人は宮城亀で、論説、論文、文苑、教育情報を掲載しています。永珣も会員であり購読していました。

新聞資料には欠号（停電や台風などの影響）もみられますが、保存状態は良好で活版印刷からオフセット印刷、紙面や用紙の大きさや質などより近代八重山の印刷史を知る上でもとても貴重な資料です。

『先島新聞』新聞資料２・３

『八重山新報』新聞資料４～10

『先嶋朝日新聞』新聞資料 12～17

小話　新聞蒐集のきっかけ―100 年後の子ども達のために―

永珣は新聞収集のきっかけについて、1960（昭和 35）年 10 月 5 日の『八重山毎日新聞』の「郷土紙綴って 44 年」の見出しの記事で「八重山で新聞が刊行されたのは 1917（大正６年）４月の『先嶋新聞』からでした。当時、石垣尋常小学校で郷土史の研究を続けていたものの、研究するための資料がなく、相当、苦しい思いをしました。その経験から私は、「そうだ、百年後の子どもたちのために郷土史の資料を残そう」と思い立ち、それをきっかけに新聞綴りをはじめた」と述べています。

※新聞記事の内容の一部を読者が理解し易いように加筆、修整した。

『八重山民報』新聞資料 18

『海南時報』新聞資料 20～38

『八重山タイムス』新聞資料 42～57

『南西新報』新聞資料 58～64

『自由民報』新聞資料 65～71

『南琉タイムス』新聞資料 72～74

『南琉日日新聞』新聞資料 75・76

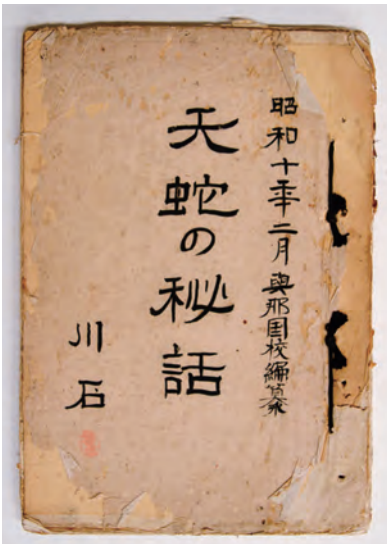
『兒童の産業』新聞資料 11

『八重山こども新聞』新聞資料 41

【８】その他の資料

喜舎場永珣資料には、その他にスクラップした資料があります。永珣が切り抜きなどしてスクラップとしてまとめたもので、「スクラップ資料」と呼んでいます。スクラップ資料は 56 点あり、「鎌倉芳太郎ノート」をコピーしたものも含まれています。

神田清輝発表（昭和七年）　沖縄郷土歴史読本　スクラップ資料 7



昭和十年二月　與那国校編纂　天蛇の秘話　スクラップ資料 8

八重山の動物、その他資料 15

一九三一（昭和六年）十一月　八ヱ山史料　Ｖ号
その他資料 22

資　料

ここでは、喜舎場永珣や彼の収集した資料、及び本書を理解するために手助けとなる資料について補足し紹介します。

１．音声資料の内、各テープ類の概要

音声資料には、レ―コードなどのほかに録音された各テープ類があります。その詳細な内容は次のとおりとなっています。

【音－002－1】

1965（昭和 40）年、東京八重山郷友会有志が喜舎場を東京オリンピックへ招待しましたが、喜舎場は 81 歳の高齢のため断りました。そのため、有志たちはテープレコーダーを喜舎場に贈呈しています。テープにはそれへのお礼を同年４月 10 日に喜舎場が方言で述べたものです。保存状態は良好です。

【音－002－2】

1934（昭和９年 10 月、日本コロムビアで喜舎場が監督となり大濱津呂、崎山用能、仲本政子が吹き込んだ八重山民謡 18 曲が録音されています。録音時のレコードの状態は悪く、針が飛んでいるものや雑音が多く、「安里屋ゆんた」は僅かしか録音されていません。テープの保存状態は悪くテープが延びています。録音年は不明です。

【音－002－3】

「安室孫盛（1906～1982）寄贈のテープ」は 1967（昭和 42）年録音とありますが、保存状態が悪く再生不能です。しかし、内容は同年４月６日、安室が「オヤケアカハチ」の映画化のため、喜舎場宅で喜舎場から「オヤケアカハチ」についての話を録音したものです。「あむる・かにむい」のペンネームで文字起こしはされています。安室は石垣出身で教育労働運動の活動家としても知られ、1960 年代から沖縄をテーマとした映画製作を始め数本の映画を制作しました。

【音－002－4】

「八重山民謡誌出版記念祝賀会録音テープ№.１」は保存状態が悪く、再生不能です。

【音－002－5】

「八重山民謡誌出版記念祝賀会録音テープ№.２」

牧野清（1910～2000）のあいさつ、豊川善包（1883～1977）の乾杯の音頭、石垣市長石垣喜興（1916～2004）、沖縄タイムス社長上地一史（代読八重山支局長新川明）、八重山連合区教育委員会教育長石垣孫可（1910～1998）の祝辞、嫁や孫の祝賀舞踊が録音されています。テープが一部のびていますが保存状態は良好です。

【音－002－6】

１面は、1963（昭和 38）年６月 23 日ニッポン放送のラジオ番組「ラジオ劇場・音楽ルポルタージュ沖縄の歌」、２面は大浜安伴・みね夫妻の八重山民謡７曲（１曲は途中まで）が収められています。これは、1963（昭和 38）年５月に録音されたものです。１面の番組は小泉文夫・小島美子が構成し、ナレーションは学生が行っています。宮古、八重山の民謡と劇団ときわ座の宮古公演の一部が収録されています。「とぅばらーま」の解説は喜舎場永珣が行っています。２面の大浜安伴（1912～2001）は八重山民謡の第一人者で、妻のみね（1916～2008）は歌唱力抜群（ばつぐん）でした。安伴が 1966（昭和 41）年、上梓（じょうし）した『八重山民謡工工四』の序文を喜舎場永珣が書いています。テープの保存状態は良好です。

【音－002－7】

「八重山民謡誌出版記念祝賀会録音テープ№.３」

孫らの舞踊「松竹梅鶴亀」、医師大浜信賢（1904～1972）の祝辞、大浜は 1971（昭和 46）年『八重山の人頭税』（三一書房）を出版しました。その序文を喜舎場永珣が書いています。その他、辻野三郎によ

る舞踊「高平良万歳」、琉球政府立八重山図書館館長石堂博一（1903～1995）の挨拶、祝電披露、喜舎場永珣による挨拶、挨拶では『八重山古謡』出版にかける決意と「高那節」の歌詞解明のエピソードを披露（ひろう）しています。その他、新城利貞（1889～1968）による喜舎場を称（たた）えた「とぅばらーま」、孫の喜舎場一隆（1935～2012）による家族からのお礼の言葉、登野城字会長波照間永伴による万歳三唱、沖縄タイムス八重山支局長新川明（1931～）の閉会の辞、「ミルク節・ヤーラーヨー」が祝賀会の録音で、その後に個人の民謡独唱や家族の歌などが断片的に吹き込まれています。

【音－002－8】

「無題」内容不明で、保存状態は不良です。

【音－002－9】

レコードから「取納奉行」他３曲が録音されています。「鷲ぬ鳥節」他３曲の独唱（独唱者不明）、最後の１曲はレコードからの録音です。保存状態は良好です。

【音－002－10】

「御禮ノ言葉（1965.4.25）81 才」と記されています。内容は不明で、喜舎場永珣による東京八重山郷友会有志のテープレコーダー寄贈に対するお礼の言葉と思われます。保存状態は不良です。

【音－002－11】

「贈　喜舎場先生　八重山郷友会　沖縄民謡協会」は浦原啓作夫妻のユンタと東京八重山郷友会会長山田惣一郎の喜舎場永珣へのお礼の挨拶が吹き込まれています。浦原啓作（1897～1979）は石垣出身で、1951（昭和 26）年東京で八重山民謡保存会を結成し、八重山民謡や古謡の普及に尽力しました。1970（昭和 45）年『八重山ユンタ集＝沖縄古謡＝』を音楽之友社から出版し、喜舎場永珣が序文を書いています。テープには古謡 22 曲が吹き込まれています。山田の挨拶は喜舎場を東京オリンピックに八重山郷友会有志で招待しようと計画しましたが、喜舎場が高齢を理由に辞退したため記念品としてテープレコーダーを贈りました。喜舎場永珣は方言でお礼のことばをテープに吹き込み贈っています。それに対する山田惣一郎八重山郷友会会長からの喜舎場へのお礼のことばです。

２．八重山の新聞の歴史―永珣新聞資料より―

八重山での新聞のはじまりは 1917（大正６）年の松下莠（1858～1926）による『先嶋新聞』の創刊によります。松下は荻野山中藩（おぎのやまなかはん）の江戸藩邸（えどはんてい）で生まれ、全国を放浪（ほうろう）し二度目の来沖の際、「琉球新報」に入社しました。その後、退社し『なでしこ新聞』等を発刊し、八重山島司安東重起の勧（すす）めもあり八重山で新聞を発刊することになりました。一時、宮古支局を置き宮古号も発刊しています。1926（昭和元）年に死去しましたが、遺産は遺言（ゆいごん）により売却され、その資金により奨学資金が創設されました。この『先嶋新聞』に対抗して 1921（大正 10）年、比嘉統熙（1871～1945）が創刊したのが『八重山新報』でした。比嘉は那覇出身で、渡米し英語を学び中国大陸を放浪していました。伊波普猷の弟でジャーナリストの伊波普成などと石垣島平久保半島の安良銅山開発に携（たずさ）わりましたが失敗して、寄留民（きりゅうみん）からの支援を受けて『八重山新報』を創刊しました。世界の動向に目を向け、八重山の文学青年たちの良き理解者であったとされます。その後、那覇への引き揚げにより廃刊となりました。

『先嶋新聞』は、後に歯科医師の久高将旺（1886～1971）が社長となり、『先嶋朝日新聞』と改題して発刊されました。1931（昭和６）年久高が那覇へ引き揚げたことにより、同年、菊池傳市（生没年不明）に新聞社は引き継がれたました。戦時体制強化の中で廃刊に追い込まれました。

『兒童の産業』は子供向けの新聞で岩崎卓爾（1869～1937）が創刊しました。また、当初の編集は山里春峰（生没年不明）が担当し、富川盛全が編集発行兼印刷人で『八重山民報』が 1932（昭和７）年に創刊されています。この新聞は地元出身者による初めての新聞でした。社長は富川（1876～1948）が務（つと）めていましたが、実質的には弟で翌年、県会議員に当選した富川盛賢（1880～1960）がオーナーでした。

新進気鋭の記者が活躍しましたが、1936（昭和 11）年に廃刊しています。1935（昭和 10）年に創刊されたのが『海南時報』でした。社長は浦添為貴（1899～1953）で、廃刊した『八重山民報』の記者達が入社しました。1940（昭和 15）年、内務省情報局は言論統制を強化するため「一県一紙」の政策をとりますが、沖縄県は離島県として、沖縄本島、宮古、八重山に各一社が認められていました。八重山では 1940（昭和 15）年８月『先嶋朝日新聞』が廃刊に追い込まれ、『海南時報』一社となります。『海南時報』は戦禍のなか、1945（昭和 20）年３月まで報道を続けました。翌年１月から再刊し、社長の浦添の死去に伴い、南風原英育（1924～2016）、石垣英佳（1918～1973）と編集が引き継がれましたが、1959（昭和 34）年に廃刊しています。

『産業組合協會報』は産業組合協会によって 1934（昭和９）年に創刊されました。産業組合は 1900（明治 33）年の産業組合法によって設立された協同組合で、喜舎場資料は創刊号のみとなっています。

『石垣産業組合報』は 1935（昭和 10）年、石垣産業組合が発刊した組合機関紙で、編集発行人は富川盛賢によるものでしたが、途中、富川から黒島為祐（1911～1961）、糸数用芳（生没年不明）と編集人が変わり、再び富川が編集長となり発刊されました。

八重山支庁の広報紙『旬報』は、1946（昭和 21）年八重山出版局から発刊されました。編集は村山秀雄（1909～1990）が担当しました。後の 1947（昭和 22）年に八重山民政府となり、『八重山タイムス』と改題しています。宮良長欣（1924～2004）が編集人となり、1948（昭和 23）年から編集人は宮良長芳（1921～2012）に変わっています。「政府が新聞を持つことは好ましくない」と八重山議会で問題となったこともあり、同年９月、宮良長芳に払い下げられ、民間の八重山タイムス社として新たにスタートしました。1950（昭和 25）年には『南琉タイムス』と改題しました。1951（昭和 26）年９月４日からは石垣用人（1916～2010）が社長に就任し、翌年、名称を再び『八重山タイムス』に変更しています。1965（昭和 40）年４月４日に『八重山タイムス』社の内紛により廃刊となり、『八重山新聞』が４月 23 日より発刊されたといわれますが、編集者は不明で、石垣用人が代表（『沖縄商工名鑑』）と記されています。『八重山新聞』も 1966（昭和 41）年には廃刊となりました。

『民友』は 1946（昭和 21）年、富川清（1925～）が編集し民友社より発行されましたが、数号で廃刊となっています。『南西新報』は編集発行富川盛正（1901～1953）が創刊しました。富川は富川盛賢の息子で、教育者でした。富川も引揚者で、台湾引き揚げの佐久本勝五（1918～1980）が途中から編集に加わり、1949（昭和 24）年９月からは、佐久本が編集発行人となっています。八重山民政府擁護の与党的論調で知られています。1952（昭和 27）年に休刊し、1968（昭和 43）年より、佐久本勝五が社長となり再刊しましたが、1970（昭和 45）年に廃刊となっています。1948（昭和 23）年、『自由民報』は八重山人民党の機関紙として創刊されました。編集長は崎山信邦（1913～1986）から 1949（昭和 24）年潮平寛保（1901～1968）、1950（昭和 25）年大浜英祐（1916～2005）に引き継がれています。1954（昭和 29）年には廃刊となりました。八重山民政府や八重山民主党を激しく攻撃した内容でした。

『八重山こども新聞』は 1946（昭和 21）年 12 月１日に創刊されました。八重山文芸協会から古藤實富編集発行で発刊されています。1947（昭和 22）年からは八重山こども新聞社からの発行となりました。1948（昭和 23）年に廃刊となっています。編集者の古藤實富（1906～1961）は石垣生まれで、沖縄師範学校卒業、八重山で教職の後、1932（昭和７）年、渡台し台湾公学校訓導となりました。台湾で児童文学や俳句を発表、1946（昭和 21）年八重山に引き揚げました。八重山初級学校教員となり、八重山俳句会を結成し指導しています。また、木版画にも優れ、作品は文芸雑誌『八重山文化』等の表紙を飾っています。

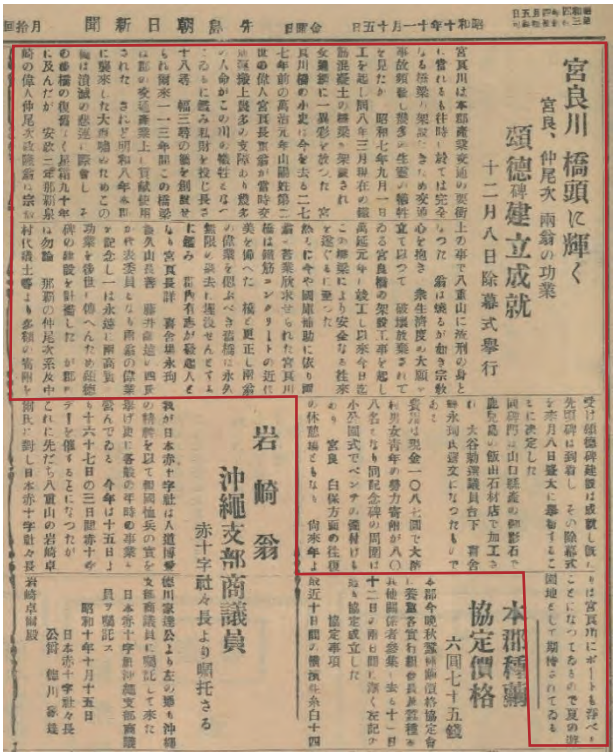
1950（昭和 25）年には、大浜信光社長兼編集発行人の『南琉日日新聞』が創刊されています。大浜信光（1902～1988）は沖縄師範学校卒業、校長で詩人でした。戦後は文芸誌『八重山文化』を創刊しました。1951（昭和 26）年８月からは村山秀雄が編集発行人になり、1952（昭和 27）年には浦崎賢保（1898

～1965）を社長に迎え、『八重山毎日新聞』に改題しています。1962（昭和 37）年、浦崎長哲（1917～1970）が編集長となり、浦崎の退社により村山秀雄が社長兼編集長に就任しました。

『八重山朝日新聞』は 1962（昭和 37）年７月、屋部憲一（1930～2016）により創刊されました。屋部は琉球大学卒業、八重山民政官府職員を経て新聞を創刊しました。1967（昭和 42）年、『南西新報』と改題し社長に佐久本勝五を迎えるとの社告を出しましたが、佐久本が『南西新報』の復刊と述べるように、経営権をすべて譲渡（じょうと）しており、『八重山朝日新聞』は 1967（昭和 42）年廃刊しています。

３.喜舎場永珣ゆかりの記念碑―大切なものを未来へつなぐ―

1932（昭和７）年に教職を退（しりぞ）いた永珣は、その後、決して研究だけに没頭（ぼっとう）した訳ではありませんでした。地域活動や各種委員の委嘱を受け、地域における広い分野へも助力、尽力する傍（かたわ）ら、自身の調査研究した地域に残る歴史や文化、文化財の魅力を広く周知し、地域の方々が文化や歴史に愛着を持つようにと、過去の出来事や八重山の歴史に関する碑、個人・団体の偉業や功績を称えた頌徳碑（しょうとくひ）などの建立に碑文（ひぶん）を起草（きそう）することにより、大切なものを未来へつなぐことに取り組みました。



宮良川架橋碑の建立に関する記事
『先島朝日新聞』
1935（昭和 10）年 11 月 15 日

現在でも石垣市内には、永珣の関係した碑が 10 箇所に残っています。ここでは、永珣にゆかりのある碑として紹介していきます。

永珣が、はじめて碑の建立に碑文を起草したのは 51 歳の時でした。退職から３年後の 1935（昭和 10）年の宮良川架橋頌徳碑の建立です。その後、太平洋戦争中の戦局が日々激しさを増していったためか、戦前における碑文の起草はこの一件だけでしたが、戦後は 1946（昭和 21）年の波照間高康頌徳碑文の起草を皮切りに、字平得の新本井戸の碑文、字宮良の赤馬の詩碑文とアンナーラ（東瓦）インナーラ（西瓦）の碑文、字大川にある明和の大津波避難者合葬碑文、字白保の真謝川井戸の碑文、字新川冨崎の石垣永将翁頌徳碑文などの起草に関わりました。そして最後に手がけたのは、永珣 84 歳の時のオヤケ赤蜂慰霊碑文の起草でした。

これらの碑は、地域の方々や関係者により今も大切に守られています。その内、石垣市字白保に所在する真謝井戸（まじゃんがー）は 1996（平成８）年 11 月に石垣市指定文化財〔記念物（史跡）〕となり保存が図られ、最後に手がけたオヤケ赤蜂慰霊碑前では、毎年、オヤケアカハチの命日とされる旧暦の３月３日に大浜地域の方々により慰霊祭（いれいさい）が行なわれています。過去に起こり、石垣島の先人達が体験した出来事についての教訓や先人の偉業を私たちへ伝える大切な場所となっています。

喜舎場永珣の生誕から百年にあたる 1985（昭和 60）年には、喜舎場永珣生誕百年記念事業期成会により、島々が眺望できる風光明媚（ふうこうめいび）な石垣市字新川の冨崎の地に喜舎場永珣の功績を讃えた顕彰碑が建立されました。

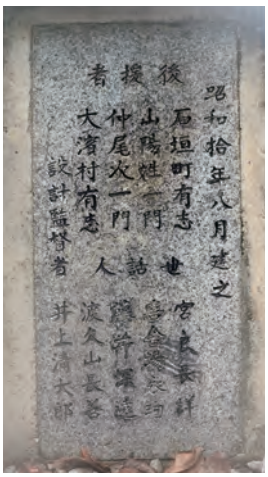
これらの碑文を巡り「八重山の研究の父」と呼ばれる永珣の八重山の歴史や文化、地域への思いを感じ、再び八重山の歴史や文化の魅力などについて考えてみては如何でしょうか。

次に主な石碑について紹介していきます。

①オヤケ赤蜂之碑

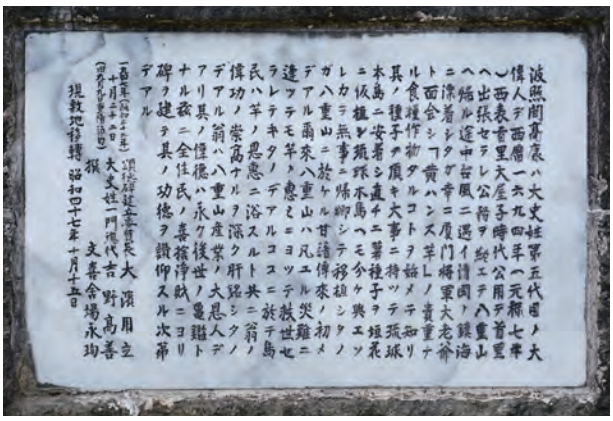
石垣市字大浜（崎原公園内）　1957 年４月建立　左：碑全景　右：碑文

②宮良川架橋頌徳碑



石垣市字宮良（宮良橋北側）　1935 年建立　左：正面全景　中：裏面碑文　右：裏面下建立関係者

③波照間高康頌徳碑



石垣市字大川（沖縄県立八重山農林高等学校南東角）　1947 年建立　左：正面全景　右：正面下碑文

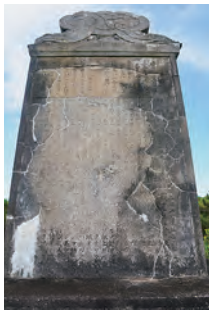
④新本井戸の碑

石垣市字平得（宇部御嶽の西側近隣）　1950 年建立　左：正面全景　中：裏面碑文　右：側面建立関係者

⑤宮平長延頌徳碑

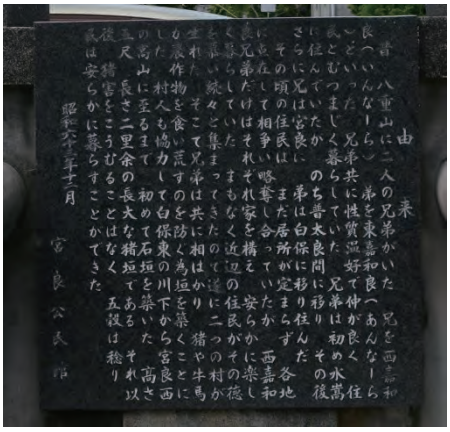
石垣市字石垣（バンナ公園内）　1951 年建立　左：正面碑全景　中：裏面碑文　左上：側面建立関係者

⑥赤馬の詩碑



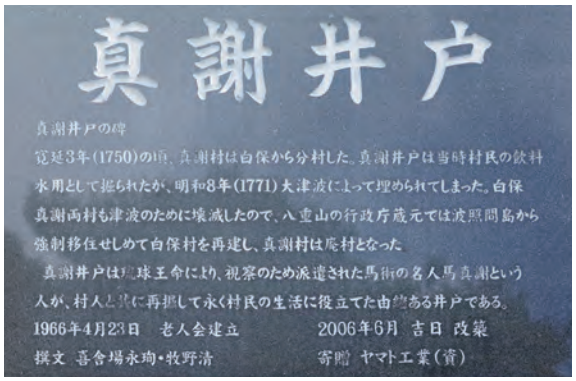
石垣市字宮良（宮良集落南端）　1955 年建立　左：碑正面全景　中：赤馬の銅像　右上：碑正面　右下：裏面碑

⑦アンナーラ・インナーラの碑



石垣市字宮良（宮良集落内旧公民館跡近隣）　左：碑正面全景　右：碑文（現在の碑文は宮良公民館による）

⑧真謝井戸の碑



石垣市字白保（白保集落内）　1966 年建立　左：真謝井戸全景　右：碑文（2006 年改築）

⑨喜舎場永珣顕彰碑

石垣市字新川冨崎　1987 年建立　左：碑正面全景

⑩石垣永将翁頌徳碑

石垣市字新川冨崎　1968 年建立　碑正面全景

小話　名乗りについて

私たちが使用している名前は個人を特定し、社会を維持していくために、国が管理を行なっています。名前には、ひらがな、カタカナ、使用できる漢字が決まっており、生まれた時には 14 日以内に名前を届出る義務があること、名前を変更する際には手続きが必要になることなどが戸籍法で定められています。私たちはそれぞれの名前を契約や色々な手続の際に使用しています。

ところで琉球王府時代には功績（こうせき）や功労（こうろう）により王府より名乗（なの）りや家譜（かふ）（系譜（けいふ））を持つことが許可され名乗りました。琉球王府時代に八重山で許可された名乗りは 60 件に及ぶとされます。

喜舎場永珣の名には「永」の一字が付きます。琉球王府より「永」の名乗りを許された集団（一門）は「嘉善姓」と呼ばれ、永珣もルーツを辿っていけば嘉善姓へと繋がっていくとされます。

嘉善姓の初代（元祖）永展という人物は、560 年前に登場しました。オカケアカハチ事件の頃に琉球王府より「永」を名乗ることが許されたとされ、以後、嘉善姓の方々は男性の名に「永」の一字を付けることが一般的となりました。また、度々、八重山の歴史に深く関わりを持った人物が輩出されたとされます。

永珣は自身の調査や研究より自分のルーツに関係しても興味を持ち、取り組んでいます。その一つが字川平にある嘉善姓本家の仏壇に掲げられた「本知」と彫られた扁額（へんがく）です。この「本知」という言葉には「原点を忘れない」との教訓を記したものとされ、永珣と嘉善姓の関係者により製作されたとされます。

もう一つは字新川冨崎に所在する「石垣永将翁頌徳碑」です。この碑は嘉善姓の関係者により元宮良頭職を務めた石垣永将を讃え建立されました。永珣が碑文を起草しています。右の写真は永珣が碑建立の祝賀会の際に石垣永将翁について説明している様子です。

なお、数十年前まで、琉球王府時代からの名残で、氏名に一字を付ける習慣が残っていましたが、現在は、かつての習慣に縛られることなく、自由に名を付けるようにと変化しています。

喜舎場永珣年譜

年　月　日	出来事
1885（明治18）年	
4月	父永清は選抜医学生として官費で那覇医学教習所へ入学（月手当て拾円補助）する。
7月15日	沖縄県八重山郡石垣村字登野城にて、父永清（23歳）、母ヲナリムイ（26歳）の長男として誕生する。幼名はマイトゥであった。
	医学講習所入学の恩典により人頭税は免除となる。
1887（明治20）年　3歳	
3月	那覇医学講習所は沖縄医生講習所と改称、父永清が一時帰省する。
1889（明治22）年　5歳	
3月	父永清、沖縄医生教習所を卒業する。
5月	父永清、長崎第五高等中学校医学部へ入学する（月手当弐拾円補助）。
1892（明治25）年　8歳	
3月31日	父永清、長崎第五高等中学校卒業と同時に内務省医術開業試験に合格し、医籍に登録される。
4月1日	永珣、大川尋常高等小学校へ入学する。
4月6日	父永清、沖縄県立病院へと勤務となる。
6月5日	父永清、那覇で結核のため死去、享年30歳であった。
1895（明治28）年　11歳	
	全校生徒一同竹富町見学があり、学校生徒の断髪事件が起こる。
1900（明治33）年　16歳	
	八重山島高等小学校を卒業する。
	沖縄県師範学校への進学を希望するが、祖父に反対され、校長先生の紹介を受け八重山島庁の給仕となる。
	八重山島庁の給仕の給料の半分を家庭に入れ、半分を貯金し進学の準備を進める（当時の日給は10銭）。
1903（明治36）年　19歳	
	師範学校の入試試験に合格する。親戚や校長先生の祖父説得により沖縄県師範校簡易科へ入学する。
1905（明治38）年　21歳	
7月8日	沖縄県師範学校簡易科を卒業する。
	沖縄県管内に於ける尋常小学校本科正教員の免許証を受領する。
	母校の大川尋常小学校へ訓導として配属される。
1906（明治39）年　22歳	
6月1日	6週間短期現役兵として熊本第十三連隊へ入隊する。
7月12日	国民軍幹部適任証を受領する。
8月	石垣村の豊年祭時に字登野城の旗頭持ちに選任される。
9月	文部省から日本全国の民謡、俗謡、俚謡調査依頼があり、校長先生より石垣村の担当に命ぜられる。２週間かけ駆け足式で先輩古老を歴訪し、調査書を提出する。

年　月　日	出　来　事
	この頃より民謡に関する興味をおぼろげながら持つようになる。
	伊波普猷が東京帝国大学を卒業し、故郷の沖縄へ帰郷する。
1907（明治 40）年　23 歳	
	伊波普猷（32 歳）が八重山の民謡、土俗、言語調査のため、はじめて八重山を訪れる。永珣は校長先生の命を受け案内役を務める。
	この頃より永珣は郷土研究を本格的に開始する。
３月 31 日	独立校となった八重山郡平得尋常小学校へ訓導兼校長で赴任する。
	平得の各戸を歴訪して平得村のュンタ、ジラバ、アヨウなどの民俗調査を手がける。
	永珣は工夫した取り組みにより子供達の学校への出席率が急上昇する。
７月２日	永珣 23 歳で喜友名盛益の長女敏（23 歳）と結婚する。
	伊波普猷より『球陽』などの書籍が寄贈される。
12 月 24 日	沖縄県師範学校で臨時講習会を受講、小学校本科正教員資格を取得する。
1908（明治 41）年　24 歳	
３月 27 日	沖縄県八重山郡大川尋常高等小学校に転勤となる。
４月１日	八重山は一郡一村となる。
1909（明治 42）年　25 歳	
４月 13 日	独立校となった沖縄県八重山郡川平尋常小学校の初代校長として赴任する。川平の古老・先輩方を訪ねて古謡を採取、伝説等の調査研究に手を染める。
	川平の節祭の行事や次第、神詞（ロ）の聞き取りを行う。
1910（明治 43）年　26 歳	
	川平村に伝わる民俗調査及び桴海、仲筋地域の古老より伝承を聞き取り記録する。
５月中旬	大きい星が毎晩異様な光を帯びて接近するので川平村で大騒ぎとなる。後にこの星は 76 年の周期を持つ『ハレー彗星』と判明する。
	『大和墓』の調査を行う。
1911（明治 44）年　27 歳	
３月 28 日	八重山郡登野城尋常小学校に転勤する。
12 月	伊波普猷が再び八重山へ来島。20 日余りの研究調査中、行動を共にして協力する。
	伊波普猷より「鷲ぬ鳥節」の作者・作られた年代を調査して突き止めて欲しいと依頼される。
	伊波普猷より歴史・民俗を研究するものは、古文書を読めること、歴史は足で書けと教授を受ける。
	「大和墓の由来について」を『琉球新報』に発表する。
	「八重山は歌謡の国、舞踊の島」を『沖縄毎日新聞』に発表する。
1912（明治 45 年、大正元年）　28 歳	
１月	元八重山島庁書記遠藤利三郎より古文書の指導を受ける。
４月２日	伊波普猷より依頼のあった「鷲ぬ鳥節」の作者・年代を突き止めて報告する。

年　月　日	出　来　事
1913（大正２）年　29 歳	
	大浜用能翁の家に通い古文書の勉強をする。蔵元制度、機構並びに諸制度等に関してなど、八重山の歴史を勉強する。
	大浜用能翁の家に通い古文書の勉強をする。蔵元制度、機構並びに諸制度等に関してなど、八重山の歴史を勉強する。
	其の他、元頭職、元首里大屋子職、元与人職の家々を訪問し、古文書等を頂戴して研究に励む。
12 月	「松金ユンタについて」を雑誌『おきなは』12 月号第 1 巻第 6 号に発表する。
1914（大正３）年　30 歳	
３月 25 日	八重山郡西表尋常小学校校長として赴任する。
	西表最大の民俗行事「節祭」の行事の次第を記録する。
	西表島の民謡、ジラバ、アヨウ、ユンタ、ユングトゥ、家屋落成時の「アパーレー」の神歌を記録する。
	大原越地の現地調査で網取に行き、ヌバマ フチィの記録、鹿川村跡ではナサマ美人の伝承等を調査し、船浮では船浮カマドの伝承を調査する。
	鳩間の古謡の調査研究を行う。
４月１日	八重山一村は石垣村、竹富村、与那国村の四村となる。
1915（大正４）年　31 歳	
４月８日	白保尋常小学校訓導に転勤となる。
	白保の民俗、古謡等と宮良村の古謡を記録する。
	伊原間の古謡、年中行事の神司の神詞を記録する。
	宮良村の豊年祭の「アカマター神行事」の調査研究に取り組む。
1916（大正５）年　32 歳	
	「しきだ盆の歌」を『先嶋新聞』に発表する。
	「八重山の歌謡赤馬節について」を『先嶋新聞』に発表する。
1917（大正６）年　33 歳	
２月 13 日	八重山郡石垣尋常小学校へ訓導として赴任する。
1918（大正７）年　34 歳	
	石垣村内の民俗資料並びに散逸する古文書類の蒐集を行う。
1920（大正９）年　36 歳	
１月１日	「八重山の歌詞について」を『先嶋朝日新聞』に発表する。
５月５日	岩崎卓爾が『ひるぎの一葉』を出版、その中に民謡、童謡を寄稿することで協力する。
８月 14 日	北里蘭が八重山の民謡、言語調査のため来島し、案内役を命ぜられる。
８月 27 日	八重山郡白良小学校訓導兼校長に任命される。
1921（大正 10）年　37 歳	
１月 23 日	柳田國男が来島、八重山島司の命を受けて八重山お嶽研究調査（５日間）へ随行する。
	柳田より『八重山島民謡誌』を早く出版するようにと勧められる。
10 月	竹富島の民俗行事「種子取行事」の調査を行う。

年　月　日	出　来　事
1922（大正 11 年）　38 歳	
２月 18 日	鎌倉芳太郎が来島する。権現堂の建築様式並びに仁王像の彫刻の手法等の調査を行う。
３月 25 日	伊原間の「マヤヌ神」神行事の次第と神詞（ロ）を記録する。
４月１日	他府県学事視察へ行く。その際に『八重山島民謡誌』の原稿を柳田國男に提出する。
８月初旬	沖縄県社会教育主事島袋源一郎が来島、宮良村の「赤マター祭」を見学する。
８月１日	東洋音楽研究の権威者田辺尚雄が八重山民謡およびユンタ、ジラバ、アヨウ等の古謡の研究調査のため来島する。八重山の民謡を田辺は、芸術的価値は世界的民謡と称賛する。
1924（大正 13）年　40 歳	
４月 26 日	『八重山島民謡誌』を郷土研究社より出版する。
1926（大正 15、昭和元）年　42 歳	
	「海南小記を読む」を『民族』第１巻第３号に書評を発表する。
	「八重山島の即興詩人」を『民族』第１巻第６号に発表する。
1928（昭和３）年　44 歳	
４月 13 日～15 日	日本青年館主催第３回郷土民謡舞踊大会に八重山芸能団の監督として出場する。
８月 15 日	西表古見村の豊年祭の「アカマター神行事」調査を行う（１回目）。
	「八重山の音楽と舞踊」を『民俗芸術』第１巻第４号に発表する。
８月 20 日	「東京紀行と八重山の芸術について」を『先嶋朝日新聞』に発表する（27 日間連続掲載）。
４月 17 日	「琉球八重山の音楽と舞踊」を『万朝報』（東京）に発表する。
1929（昭和４）年　45 歳	
８月 22 日	西表古見村の豊年祭の「アカマター神行事」調査を行う（２回目）。
	「八重山に於ける人魚の伝説」を『旅と伝説』第２巻第５号に発表する。
1930（昭和５）年　46 歳	
８月	新城島下地の豊年祭の「アカマターの神行事」の調査を行う。
８月 31 日	八重山郡大浜尋常高等小学校長を任命される。
1931（昭和６）年　47 歳	
	「八重山列島に於ける葬礼について」を『旅と伝説』７月号に発表する。
８月	小浜島の豊年祭の「アカマター神行事」の調査を行う。
1932（昭和７）年　48 歳	
３月 31 日	依願退職する。
８月	西表古見村の豊年祭の「アカマター神行事」の調査を行う（３回目）。
９月	黒島村の民俗、古謡調査を行う。
11 月 11 日	九州帝国大学教授の大島広が来島する。昆虫、動植物と関連のあるユンタ、民謡資料を提供する。
1933（昭和８）年　49 歳	
１月７日	金銭債務調停委員に選任される（那覇裁判所長）。

年　月　日	出　来　事
４月９日	岩崎卓爾胸像建設委員となり胸像除幕式を挙行、同胸像碑文を起草する。
７月 22 日	黒島の民俗調査を行う。
８月	小浜島の豊年祭の「アカマター神行事」の調査を行う。
	「石垣島の陰膳について」を『島』第１巻第５号に発表する。
12 月	東恩納寛惇が八重山に来島、同行し調査の手助けをする。
1934（昭和９）年　50 歳	
１月 25 日	石垣島社会教育委員として嘱託を受ける。
４月１日	八重山郷土研究会が発足、会長岩崎卓爾、永珣は副会長となる。
	「八重山群島の年中行事」を『旅と伝説』第７巻第７号に発表する。
	「八重山に於ける旧来の漁業」を『島』第２巻に発表する。
	コロンビヤレコード会社の依頼を受けて、はじめて琉球民謡をレコードに吹き込ませる。
	「死線を越えてレコードの旅へ」を『八重山民報』に発表する。
	竹富島の民俗調査を行う。
1935（昭和 10）年　51 歳	
８月	台北高等学校教授須藤利一、民俗調査のため来島する。
	宮良川架橋頌徳碑文を起草する。
12 月 15 日	石垣町制 10 周年記念事業の一環として『石垣町誌』を編纂する。
1936（昭和 11）年　52 歳	
５月 10 日	波照間島の民俗、古謡等の調査を行う。
	南海山桃林寺の仁王門改築趣意書の起草を依頼される。
	河村只雄が南方文化研究調査のため来島する。
	「パイフタ、フンタカ、ユングトゥ」を『伊波普猷還暦記念論文集　南島論叢』に発表する。
1937（昭和 12）年　53 歳	
５月 18 日	岩崎卓爾死去。
６月	鳩間島の民謡、古謡、民俗調査を行う。
1938（昭和 13）年　54 歳	
５月 24 日	河村只雄が八重山へ２回目の来島をなす。河村の波照間島の民俗調査研究に同行する。
	八重山郡養蚕業組合議員兼郡副組合長となる。
1939（昭和 14）年　55 歳	
１月 11 日	八重山神社建設に関する準備事務を石垣町長大浜孫伴より嘱託される。
	人事調停委員となる。
	八重山郡に於ける郷土資料調査員に嘱託される。
	八重山郷土研究会長となる。
1940（昭和 15）年　56 歳	
２月 18 日	登野城字会長となる。

年　月　日	出　来　事
３月 28 日	八重山郡協力会議員に委嘱される。
６月８日	石垣町負債整理委員会委員に任命される。
11 月 18 日	登野城字会長の名称は部落会長と改称され、永珣が会長となる。
12 月	日劇ダンシングチームが来島し、星潤を招いてダンシングチーム２人に八重山舞踊を習得させる。
	「爬龍船の神事（黒島）」を『南島』第２輯に発表する。
1941（昭和 16）年　57 歳	
11 月４日	与那国島の民俗、祭事、古謡の調査を行う。
	大東亜戦争が始まる。
1942（昭和 17）年　58 歳	
７月 18 日	河村只雄が南方文化研究調査のため３度目の来島をする。
1944（昭和 19）年　60 歳	
４月 29 日	登野城町内会連合会長となる。
５月初旬	台湾に疎開始まる。
10 月 12 日	午前８時 30 分頃、米軍飛行機４機編隊によるはじめての空襲がある。
1945（昭和 20）年　61 歳	
３月下旬	第一次避難の命あり。
６月１日	第二次避難の命あり。軍指定の避難地に官公衙職員と医師等は６月５日までの避難命あり。
	永珣は資料をコンクリート造りの豚舎の中に保管し避難する。
６月下旬	避難地ではマラリア患者が急増、死亡者続出する。
	日本無条件降伏。
1946（昭和 21）年　62 歳	
１月４日	八重山民政府議会議員となる。
２月 28 日	八重山文化部事務に嘱託される。
３月７日	公立八重山中等学校より郷土史の講義を嘱託される。
４月 18 日	八重山郡祭祀顧問となる。
５月 18 日	小浜島の民俗調査を行う。
６月	「沖縄に於ける爬龍船の由来」を『八重山文化』６月特大号に発表する。
７月	「石垣町の豊年祭と真乙姥綱曳について」を『八重山文化』第一輯に発表する。
８月	「アンガマと無蔵念仏」を『旬刊民友』第８号上旬に発表する。
９月	「八重山産業界の大恩人西表首里大屋子波照間高康翁」を『八重山文化』９月号に発表する。
10 月	「八重山の芸術―桃林寺、権現堂の芸術」を『八重山文化』10 月号に発表する。
1947（昭和 22）年　63 歳	
４月 31 日	八重山初級高等学校並びに八重山農林高等学校より郷土史の講義を嘱託される。
８月 13 日	伊波普猷が死去する。
９月 18 日	波照間高康翁の頌徳碑文を起草する（大川）。

年　月　日	出　来　事
1948（昭和 23）年　64 歳	
5 月 18 日	マクラム軍政官の要請により『南琉八重山略史』を編纂する。
	「宮良河畔の三人幽霊」を『八重山文化』８月号に発表する。
1950（昭和 25）年　66 歳	
	八重山民政府議会議員として感謝状を受ける。
	八重山民政府議会議員として復興博覧会の感謝状を受ける。
	新本井戸の碑文を起草する（平得）。
1951（昭和 26）年　67 歳	
	八重山歴史編纂を委嘱される。
1952（昭和 27）年　68 歳	
	大浜津呂、幸地亀千代共著『八重山民謡工工四』の序文を草する。
	宮平長延翁頌徳碑文を起草する。
	「おもろの語源」を『沖縄タイムス』に発表する。
1953（昭和 28）年　69 歳	
6 月 30 日	『八重山歴史』の原稿が完結し、琉球文教図書株式会社へ原稿を発送する。
10 月	「世界的な八重山島の民謡に就いて」を『沖縄郷土研究誌』に発表する。
11 月	琉球政府の許可を得て大阪の光印刷所へ『八重山歴史』原稿発送する。
1954（昭和 29）年　70 歳	
３月	児玉清子、八重山古典舞踊研究のため来島する。
３月５日	『八重山歴史』が出版される。
９月	金関丈夫が八重山群島の古代文化研究調査のために来島する。
９月 20 日	琉球政府文化財専門審議会専門委員に任命される。
1955（昭和 30）年　71 歳	
	「八重山諸島探検」を『琉球新報』に発表する。
	赤馬の詩碑の碑文を起草する。
1957（昭和 32）年　73 歳	
９月 22 日	白良尋常高等小学校の教え子一同により白良小学校にて古希の祝典が挙行される（記念品書棚贈呈）。
旧８月８日	石垣尋常高等小学校の教え子一同より古希記念品（客間用応接セット）が贈呈される。
12 月 27 日	早稲田大学西村朝日太郎が民俗調査研究のため来島する。
1958（昭和 33）年　74 歳	
	早稲田大学本田安次が古典舞踊研究のため来島する。
	「郷土民謡舞踊大会の思い出」を『芸能の島八重山』に発表する。
11 月１日	妻敏死去する（73 歳）。
1959（昭和 34）年　75 歳	
	早稲田大学滝口宏ほか八重山総合調査のため来島する。フルスト原遺跡並びにアコウスク貝塚を案内する。
	「安里屋ユンタ考―上村六郎氏の疑義に応えて」を『琉球新報』に発表する。

年　月　日	出　来　事
1960（昭和 35）年　76 歳	
	早稲田大学西村朝日太郎が八重山の民俗調査のため再び来島する。
	「八重山民謡の史的考察」を『琉球文学』に発表する。
	ハワイ大学教授ジョージ・H・カーが来島し、永珣所蔵の古文書一部を写真にて撮影する。
1961（昭和 36）年　77 歳	
７月１日	沖縄タイムス社より文化賞を受賞、同月８日に八重山郷友会主催の文化賞受賞の祝賀会が行われる。
	明和の大津波遭難者合葬碑の碑文を起草する（大川）。
1962（昭和 37）年　78 歳	
３月３日	柳田國男米寿記念祝賀会に沖縄県代表として参加の依頼を受けるが、体調を考え不参加とする。
	「鷲ユンタ　鷲の鳥節について」を『八重山毎日新聞』に発表する。
	「八重山の民謡と踊り」を『民芸』に発表する。
８月８日	柳田國男が死去する。
	「柳田國男と南島」（沖縄タイムス）の追悼文を発表する。
1963（昭和 38）年　79 歳	
	「火あぶりになった八重山の殉教者」を月刊『沖縄』に発表する。
	「野底マーペーとチィンダラ節」を月刊『沖縄』に発表する。
	富島妙子著『八重山民謡筝曲工工四』の序文を草する。
1964（昭和 39）年　80 歳	
２月 14 日	アンナーラ（東瓦）インナーラ（西瓦）の碑文を起草する（宮良）。
1965（昭和 40）年　81 歳	
	「アカヨーラの語源について」を『八重山毎日新聞』に発表する。
７月 15 日	八重山誌友相愛会長を委嘱される。
	Ｃ・アウエハント、波照間島民俗研究のため来島する。
1966（昭和 41）年　82 歳	
	真謝川井戸の碑文を起草する（白保）。
	大浜安伴著『八重山民謡三味線工工四』序文を草する。
	富島妙子著『八重山民謡筝曲工工四』再版序文を草する。
1967（昭和 42）年　83 歳	
６月 30 日	『八重山民謡誌』が沖縄タイムス社より出版される。
	「鷲の歌」を『南島研究』に発表する。
	神田精輝著『沖縄郷土歴史読本』の出版に際し序文を草する。
1968（昭和 43）年　84 歳	
	石垣市自治功労賞を受賞する。
	石垣永将翁頌徳碑文を起草する。
	オケヤ・アカハチ碑文を起草する。
	牧野清著『八重山の明和大津波』序文を草する。

年　月　日	出　来　事
1969（昭和 44）年　85 歳	
４月 29 日	勲四等瑞宝章を受ける。
	大浜信賢著『八重山の人頭税』の序文を草する。
	寿楽会より 85 歳記念品（ソファー）が贈呈される。
	85 歳の生年祝の記念誌『八重山歴史年表』を著し配布する。
1970（昭和 45）年　86 歳	
９月５日	『八重山古謡』を沖縄タイムス社より出版する。
1971（昭和 46）年　87 歳	
２月	柳田賞を受賞する（日本民俗学会より）。
1972（昭和 47）年　88 歳	
４月２日	永珣死去。

石垣市立八重山博物館開館50周年記念企画展

喜舎場永珣と資料

発行年月　令和4年10月
発　　行　石垣市立八重山博物館
〒907-0004
沖縄県石垣市字登野城4番地1
印　　刷　有限会社 八島印刷
沖縄県石垣市字石垣258番地

※本書の全部又は一部を無断で転載・複製することを禁じます。

美ら島おきなわ文化祭2022
第37回国民文化祭 第22回全国障害者芸術・文化祭